

仙台市文化財調査報告書第91集

東北電力鉄塔関係遺跡調査報告

昭和61年3月

仙台市教育委員会
東北電力株式会社宮城支店

仙台市文化財調査報告書第91集

東北電力鉄塔関係遺跡調査報告

昭和61年3月

仙台市教育委員会
東北電力株式会社宮城支店

序

今世紀も終晩期にさしかかった今日、高学歴や高齢化という大きな社会変動のなかで、いままさに地域社会は質的な転換をせまられているといえます。とりわけ文化問題に関する関心が一層の高まりをみせておりますし、行政の文化化やまちづくりの中にも文化性を求める等、ひと頃のように文化といえば教育の中でという観念から大きく輪を広げ、広々とした空間の中で時間の推移をも考慮した文化観が求められるようとしています。

このような動きの中にあつて、文化や芸術そして文化財といった文化一般に対する多種多様な市民のニーズは漸次高揚をみせる一方、各種の民間研究団体や市民のコミュニティグループの活動が生れはじめていますことは大変よろこばしい限りであります。とくに生活の身近かにある文化的資源を掘り起こし、そこから地域文化の特性を知り、見直し、分析することによって地域の未来文化の創造を喚起することはきわめて大切であり、また地域づくりを考える上で最も意義深いことであることは否定できません。なかでも文化財は、あらゆる文化の資源的存在であり、もっとも基本的資源であります。こうした資源の保護、保存、活用そして継承は、文化財行政の根幹であり、地域の文化化に対する重要な役割を担っているのです。

本報告は、東北電力鉄塔移設建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査の成果をまとめ上げたものでありますが、ここに掲載されている成果は学問的にみても、地域の歴史文化を考える上でも大変貴重な資料であります。こうした成果のかけには多くの関係機関の理解とたくさんの市民、関係者のご支援、ご協力やご尽力があつたのことで、心から感謝を申し上げる次第であります。

最後に、文化財行政に対するなお一層のご理解とご協力をお願い申し上げ、刊行にあつての挨拶といたします。

仙台市教育委員会

教育長 藤 井 黎

例 言

1. 本書は、東北電力宮城支店の仙台市西南部名取川北岸地域における「釜房支線他増強工事」鉄塔建設工事に関する遺跡群の発掘調査報告書である。

2. 本書の作成にあたり、次のとおり分担した。

本文執筆	千葉 仁
遺構トレース	千葉 仁
遺物復元	高橋明美
遺物実測トレース	高橋明美
遺構・遺物写真	千葉 仁
編集	千葉 仁

3. 遺構の略号は次のとおりとした。

SD	溝 跡	SK	土 塚
SI	竪穴住居跡	SX	性格不明遺構

4. 本書中の土色については「新版標準土色帳」（小山・佐原：1970）を使用した。

5. 本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の1：25000仙台西南部地形図を $\frac{1}{2}$ 縮尺複製したものである。

6. 実測図中の方位は、磁北に統一している。

7. 本報告は、昭和59年9月11日～9月17日（1次調査）、昭和60年8月26日～10月25日（2次調査）と2年度に渡って行なわれた調査成果をまとめたものである。しかし、昭和60年度の2次調査において更に継続調査の必要が生じており、鉄塔建設事業に関する調査は次年度以降にも予定されている。

本文目次

序文

例言

I. 調査に至る経過	1
II. 調査体制	2
III. 地理的・歴史的環境	2
IV. 調査方法と経過	4
V. 調査報告	7
〔1〕 試掘調査	7
1. No 1 鉄塔試掘調査区	7
2. No 2 鉄塔試掘調査区	9
3. No 3 鉄塔試掘調査区	10
4. No 4 鉄塔試掘調査区	12
5. No 5 鉄塔試掘調査区	13
6. No 6 鉄塔試掘調査区	14
7. No 7 鉄塔試掘調査区	15
8. No 8 鉄塔試掘調査区	16
9. No 9 鉄塔試掘調査区	18
10. No 10 鉄塔試掘調査区	19
11. No 11 鉄塔試掘調査区	20
12. No 12 鉄塔試掘調査区	21
13. No 13 鉄塔試掘調査区	23
14. No 32 鉄塔試掘調査区	25
〔2〕 本調査 (No 4 調査区)	25
1. 基本層位	25
2. 発見遺構と遺物	25
(1) 竪穴住居跡	26
1号住居跡	26
2号住居跡	26
(2) 性格不明遺構	21
2号性格不明遺構	31
3号性格不明遺構	35
4号性格不明遺構	36
(3) 土 壇	36
(4) ビット	36
3. 遺物・遺構の総括	37
(1) 遺物の総括	37
(2) 遺構の総括	40
4. まとめ	41
註記	42
写真図版	43

挿図・表・図版 目次

第1図	送電線の路線と周辺の遺跡……………	3	図版1	鉄塔遠望 (No.1鉄塔からNo.7鉄塔) ……	5・6
第2図	鉄塔関係遺跡発掘調査位置図……………	5・6	図版2	(No.8鉄塔からNo.13鉄塔) ……	5・6
第3図	No.1鉄塔試掘調査区実測図……………	7	図版3	(No.32鉄塔と茂蔭発電所) ……	5・6
第4図	遺構実測図……………	8	図版4	No.1鉄塔試掘調査区全景……………	43
第5図	断面実測図……………	8	図版5	SD-1断面……………	43
第6図	出土遺物……………	9	図版6	No.2鉄塔試掘調査区全景……………	43
第7図	No.2鉄塔試掘調査区実測図……………	10	図版7	No.3鉄塔試掘調査区全景……………	44
第8図	No.3鉄塔試掘調査区実測図……………	11	図版8	No.5鉄塔試掘調査区全景……………	44
第9図	遺構実測図……………	12	図版9	No.6鉄塔試掘調査区全景……………	44
第10図	断面実測図……………	12	図版10	No.7鉄塔試掘調査区全景……………	45
第11図	No.4鉄塔試掘調査区実測図……………	13	図版11	No.8鉄塔試掘調査区全景……………	45
第12図	No.5鉄塔試掘調査区実測図……………	14	図版12	No.9鉄塔試掘調査区全景……………	46
第13図	No.6鉄塔試掘調査区実測図……………	15	図版13	No.10鉄塔試掘調査区全景……………	46
第14図	No.7鉄塔試掘調査区実測図……………	16	図版14	No.11鉄塔試掘調査区全景……………	46
第15図	遺構実測図……………	16	図版15	No.12鉄塔試掘調査区全景……………	47
第16図	出土縄文土器①—大木8 a式……………	17	図版16	No.13鉄塔試掘調査区全景……………	47
第17図	出土縄文土器②—大木8 b式……………	17	図版17	No.32鉄塔試掘調査区全景……………	47
第18図	No.8鉄塔試掘調査区実測図……………	18	図版18	No.4鉄塔本調査区全景……………	48
第19図	No.9鉄塔試掘調査区実測図……………	19	図版19	北東断面……………	48
第20図	No.10鉄塔試掘調査区実測図……………	20	図版20	1号住居跡全景……………	49
第21図	No.11鉄塔試掘調査区実測図……………	21	図版21	上隅出土状況……………	49
第22図	No.12鉄塔試掘調査区実測図……………	22	図版22	2号住居跡全景……………	49
第23図	遺構実測図……………	22	図版23	2号・4号性格不明遺構全景……………	50
第24図	断面実測図……………	23	図版24	2号性格不明遺構・1号焼土遺構……………	50
第25図	No.13鉄塔試掘調査区実測図……………	24	図版25	1号焼土遺構断面……………	50
第26図	No.32鉄塔試掘調査区実測図……………	24	図版26	1号焼土遺構完備……………	51
第27図	No.4鉄塔本調査区実測図……………	27・28	図版27	2号焼土遺構……………	51
第28図	1号住居跡出土遺物……………	29	図版28	2号焼土遺構断面……………	51
第29図	2号住居跡出土遺物……………	30	図版29	2号性格不明遺構・1号土壌……………	52
第30図	2号性格不明遺構……………	30	図版30	2号土壌……………	52
	堆積土出土遺物……………	32	図版31	3号土壌……………	52
第31図	2号性格不明遺構……………	32	図版32	3号性格不明遺構・1号土壌断面……………	53
	1号焼土遺構出土遺物……………	32	図版33	全景……………	53
第32図	2号性格不明遺構……………	33	図版34	1号土壌……………	53
	2号焼土遺構出土遺物……………	33	図版35	出土遺物1……………	54
第33図	2号性格不明遺構……………	34	図版36	出土遺物2……………	55
	1号土壌出土遺物……………	34	図版37	出土遺物3……………	56
第34図	2号性格不明遺構……………	35	図版38	出土遺物4……………	57
	2号土壌出土遺物……………	35			
第1表	発掘調査予定地と関係遺跡名……………	1			
第2表	No.4鉄塔調査区土層計記表……………	26			

I. 調査に至る経過

昭和57年11月、東北電力株式会社宮城支店から、釜房支線他増強工事事業計画が提示された。この事業の目的は、仙台市西南部の富沢字川前浦地区から茂庭字大沢地区（茂庭発電所）間の老朽化した既設送電線鉄塔を改築大型化し、送電回線を増強することで茂庭・碓石川地区、秋保、川崎方面への電力供給を安定化させることにある。事業の中心は、東から順にNo1～No32の番号で呼称される既設鉄塔の改築工事であり、工事着工は昭和59年10月からとされていた。

しかし、No1～No14の14基分の鉄塔建設予定地となる富沢・富田・山田地区は、名取川北岸の遺跡密集地域として知られる所である。現にNo1～No13の13基は遺跡範囲内もしくは遺跡隣接地にかかっており、さらに茂庭発電所南側の1基（No32）も遺跡隣接地にかかっていた。

よって東北電力株式会社側と協議を行ない、遺跡に係する14基分の鉄塔建設予定地において記録保存と範囲確認を目的とした事前調査を行なうこととなった。発掘届は昭和58年10月に提出され、調査は鉄塔工事着工予定を考慮し昭和59年度（1次調査）と昭和60年度（2次調査）と2次期に分けて実施することになった。

第1表 発掘調査予定地及び関係遺跡名一覧表

鉄塔No. (調査区No.)	所在地	関係遺跡名	時代
No. 1	仙台市富沢字川前浦47-4	富沢鎗跡 (隣接地)	戦 国
No. 2	仙台市富沢字鍛冶屋敷前43-1		
No. 3	仙台市富沢字熊ノ前23-4	鍛冶屋敷A遺跡 (隣接地)	縄文、奈良、平安
No. 4	仙台市富田字京ノ北16-1		
No. 5	仙台市富田字京ノ北1-2	南ノ東遺跡 (隣接地)	縄文、奈良、平安
No. 6	仙台市富田字八幡中60-1		
No. 7	仙台市富田字上野中129-3	上野遺跡	縄文(中期) 奈良、平安
No. 8	仙台市富田字上野西46-2		
No. 9	仙台市山田字新田畑下中29-3	山田糸里遺構 (竹ノ内前遺跡)	奈良、平安
No. 10	仙台市山田字谷地前44-1		
No. 11	仙台市山田字御殿9		
No. 12	仙台市山田字竹ノ内前16-1	山田糸里遺構 (隣接地)	奈良、平安
No. 13	仙台市山田字欠ノ上前11-1		
No. 32	仙台市茂庭字大沢41-3	新組遺跡 (隣接地)	縄文、奈良、平安

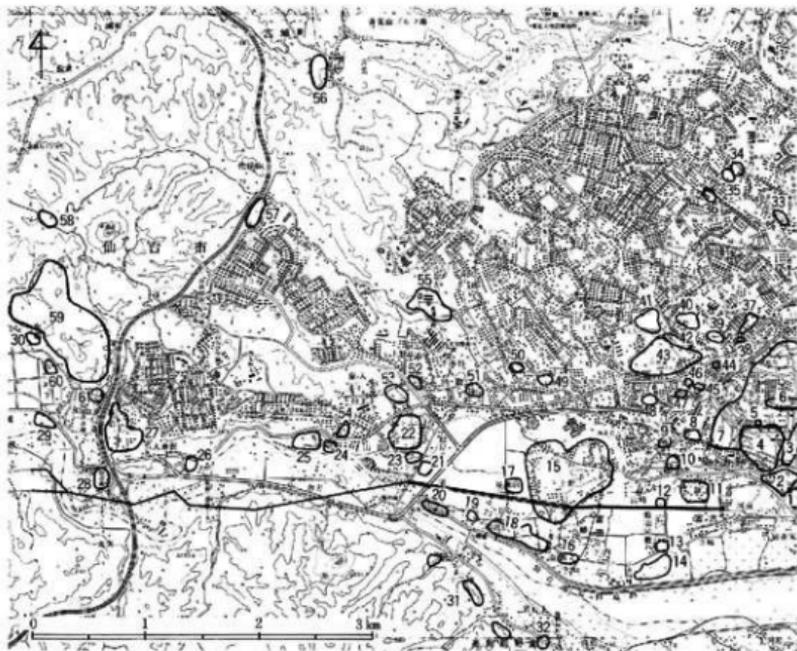
Ⅱ. 調査体制

- 調査地点 仙台市高沢字川前浦地区～山田字欠ノ上前地区・茂庭字大沢地区内
- 調査期間 1次調査：昭和59年9月11日・9月17日
2次調査：昭和60年8月26日～10月25日
- 調査対象面積 1400㎡ (14調査区合計)
- 調査実施面積 371.3㎡ (14調査区合計)
- 調査主体 仙台市教育委員会
- 調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係
社会教育課課長 阿部 達
社会教育課主幹 早坂春一
文化財調査係長 佐藤 隆
- 担当職員 1次調査 主事 金森安孝
2次調査 主事 工藤哲司 教諭 千葉 仁
- 調査参加者 1次調査 昆野賢一、千葉利彦、豊村幸宏、藤本智彦
2次調査 真中信三、阿部止了、岩間かつ江、遠藤いな子、遠藤金蔵、大友利蔵、大友勇、佐藤まさ子、佐野たみえ、菅井忠吉、菅原登枝、高橋千年世、中沢正吉、根深はつえ、三浦きよの、三浦フミ江
- 調査協力 東北電力株式会社宮城支店 板橋吾平治

Ⅲ. 地理的、歴史的環境

地理的環境

鉄塔工事と遺跡が関わる仙台市西南部の名取川北岸地域は、地形的に東から郡山低地西南端部、名取台地部、茂庭低地南端部と大きく3区分される。No1～No6鉄塔が関わる郡山低地西南端部（高沢字川前浦～富田字八幡中地区）は、標高15～20mほどで名取川と名取川支流の筑川によって旧河道、自然堤防、後背湿地が形成され、現在は水田地帯となっている。No7～No13鉄塔が関わる名取台地部（富田字上野西～山田字欠ノ上前地区）は、青葉山丘陵と高館丘陵とに挟まれた標高29～34mの段丘地形をみせているが、東端部にあたる上野地区のみ周囲からさらに4～8m小高い地形を呈している。現在は上野地区に集落が営まれ、他は畑地・水田^(註1)として利用されている。No32鉄塔が立つ茂庭低地南端部（茂庭字大沢地区）は、標高62mほど



番号	通称名	所 属 時 期	番号	通称名	所 属 時 期
1	伊古田通線	奈良、平安	32	新口上通線	内線、奈良、平安
2	下ノ内通線	縄文、古墳、奈良、平安	33	二ツ沢橋穴	古墳
3	大宮目通線	縄文(中、後)、弥生、古墳、奈良、平安	34	八木山山崎通線	縄文(中)
4	山口通線	縄文(中、後)、弥生、古墳、奈良、平安	35	二ツ沢通線	縄文
5	新堀古墳	古墳	36	青山二丁目通線	奈良、平安
6	泉崎通線	縄文(後)、古墳、奈良、平安	37	砂押屋敷通線	奈良、平安
7	富沢水田通線	弥生、古墳、奈良、平安、中世	38	砂押古墳	古墳
8	富沢清沢通線	縄文、奈良、平安	39	土手内通線	奈良、平安
9	富沢上ノ内通線	奈良、平安	40	土手内通線	縄文、奈良、平安
10	黒ノ内通線	奈良、平安	41	黒ノ内通線	平安
11	荒川通線	奈良、平安、中世	42	生事内橋穴	奈良、平安(?)
12	藤沼新入通線	奈良、平安	43	三ツ野通線	旧石巻、縄文(早、中、後)
13	藤沼新日通線	奈良、平安	44	全茂沢古墳	古墳
14	六本松通線	奈良、平安	45	宮町古墳	古墳
15	上野通線	縄文(中、後)、奈良、平安	46	新町止通線	古墳
16	富田南西通線	奈良、平安(?)	47	照東通線	古墳、奈良、平安
17	谷地前通線	奈良、平安	48	照通線	古墳、奈良、平安
18	陸前通線	縄文(中、後)、弥生、奈良、平安	49	八幡通線	古墳、奈良、平安
19	深田原通線	縄文(中)、奈良、平安	50	後田通線	奈良、平安(?)
20	深田原西通線	縄文(中)、奈良、平安	51	町通線	縄文、古墳、平安
21	河田通線	縄文、奈良、平安	52	上野山通線	縄文
22	山田上ノ内通線	旧石巻(後)、縄文(早、中、後)、平安、江戸	53	女野通線	旧石巻(前、後)、縄文(早、中、後)、平安、江戸
23	河田通線	縄文	54	湯野通線	古墳
24	岩倉通線	縄文、古墳、平安	55	御堂平通線	縄文、奈良、平安
25	新堀古墳	縄文、古墳、奈良、平安	56	青葉山通線	旧石巻
26	人妻田C通線	縄文、古墳、平安	57	佐保山通線	縄文、平安
27	人妻田通線	縄文(中)、弥生	58	梨野橋穴	縄文、奈良、平安(?)
28	人妻田B通線	古墳、平安	59	荒庭東通線	中世(付人と3城)
29	中ノ瀬通線	縄文、奈良(末)、平安	60	板ノ下通線	弥生、古墳、平安
30	向野橋穴	古墳	61	人妻田A通線	縄文(中)、弥生(中)
31	新野宮沢穴	古墳、奈良			

第1図 送電線の路線と周辺の遺跡

の河岸段丘地形を呈し、すぐ南側は東流する名取川によって急崖が形成されている。

歴史的環境

郡山低地西南端部には、縄文時代から奈良・平安時代までの遺構が重複する遺跡が多い。名取川・筑川流域の自然堤防上から後背湿地にかけて立地する、山口遺跡・下ノ内浦遺跡・六反田遺跡・下ノ内遺跡・伊古田遺跡などがその例である。近年行なわれた発掘調査では、山口・下ノ内浦遺跡から縄文時代早期の遺物が出土し、六反田・下ノ内浦遺跡からは縄文時代中期の竪穴住居跡が発見されている。さらに下ノ内浦遺跡・伊古田遺跡からは、前者が縄文時代後期の配石墓、後者が日本最大級の土偶を出土するなど枚挙にいとまがない。また、弥生時代の水田跡が発見された富沢水田遺跡、古墳時代の鳥居塚古墳・王の壇古墳・春日社古墳・教塚古墳、中世の富沢館跡などが存在している。^(註2)

名取台地部には、上野地区の段丘部に立地する上野遺跡が縄文中期中葉の遺跡として知られ、^(註3)古代条里制の跡を残す山田桑里遺構が名取台地中央部分に存在する。また名取川流域の自然堤防上には、清田原西遺跡（縄文・平安）・船渡前遺跡（縄文・弥生・奈良・平安）などがある。さらに周辺部の遺跡としては、旧石器時代前期・後期の遺物を出土した山田上ノ台遺跡・北前遺跡が西方の丘陵部に存在し、縄文時代の三神峯遺跡が北方の丘陵端部に存在している。

茂庭低地南端部には、新紙遺跡（縄文・古墳・奈良）、新熊野堂遺跡（縄文）、町田遺跡（古墳、奈良）などが存在する。また茂庭低地を囲む丘陵部には中世の館跡が存在するところである。

IV. 調査の方法と経過

発掘調査実施にあたり、広範な地域に分散する14ヵ所の鉄塔工事予定地ごとに、調査対象面積約100㎡の独立した調査区を設定し、各々の調査区には鉄塔番号にならって、東から順にNo1～13・32の番号を名称として与えた。(例 No1鉄塔工事区→No1調査区)

調査方法は、全調査区で周開の状況に応じた試掘調査を行ない、遺構等の存在を確認した上で試掘調査区を拡張し、本調査を行なうことにした。試掘調査は、昭和59年9月11・17日にNo13・32調査区で実施（1次調査）され、昭和60年8月26日から10月25日までNo1～12調査区において実施（2次調査）された。この中で本調査の必要性が認められたのは、2次調査におけるNo4調査区（鍛冶屋敷A遺跡隣接地部分）、No7調査区（上野遺跡範囲内）の2ヵ所である。

しかし、昭和60年度の本調査対象調査区が、60年秋に鉄塔工事着工予定地のNo1～5調査区に限定されていたため、実際に本調査を行なったのはNo4調査区のみである。No7調査区の本調査は次年度以降に実施することとなった。



第2図 電力鉄橋関係遺跡発掘調査位置図

『仙台市文化財分布地図』1983上4



図版1
No.1鉄塔からNo.7鉄塔
を望む(東より)



図版2
No.8鉄塔からNo.13鉄塔
を望む(東より)



図版3
No.32鉄塔と高圧発電所
(南より)

V. 調査報告

(1) 試掘調査

1. No 1 鉄塔試掘調査区

所在地 仙台市高沢字川前浦47-4 (標高14.9m)

現状 更地

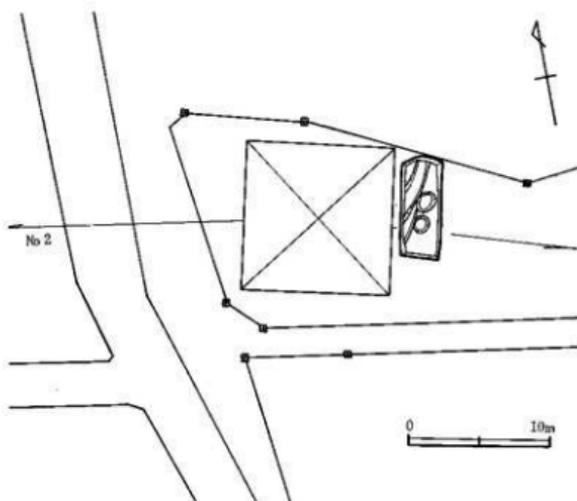
調査期間 昭和60年8月26日～8月29日

調査面積 14.4㎡

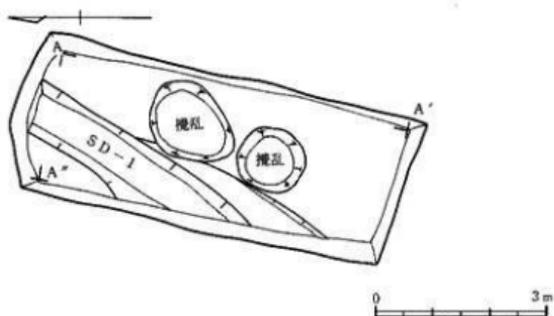
(基本層位)

重機による盛土排土作業の結果、標高13.8mで旧表面に達した。

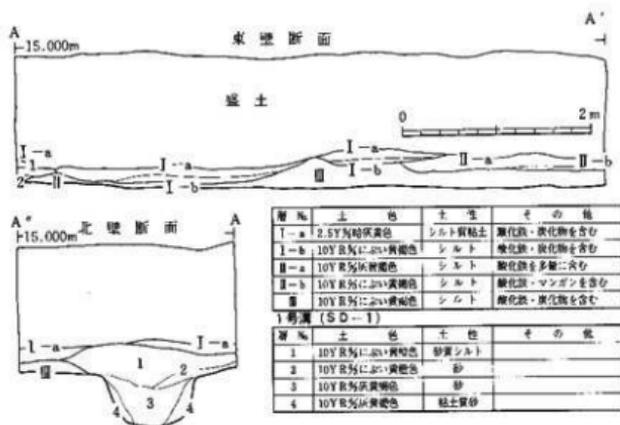
基本層位は3層に大別される。Ⅰ層は旧水田耕作土で25cmの厚さを計る。シルト質粘土で2層に細分化できる。いずれも調査区の南半部に分布しない。Ⅱ層も旧水田耕作土である。厚さ30cmのシルト質粘土で2層に細分される。調査区の南半部のみに分布している。Ⅲ層は後世の擾乱をうけておらず、しまりのよいにぶい黄褐色のシルト層である。



第3図 No 1 鉄塔試掘調査区位置図



第4図 No.1鉄塔試掘調査区平面図



第5図 No.1鉄塔試掘調査区断面実測図

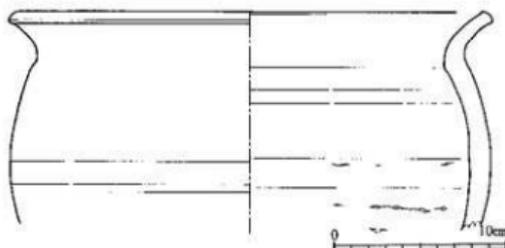
〈発見遺構・遺物〉

Ⅲ層上面を掘り込んだ溝跡が1条検出された(SD-1)。方向は北東～南西である。上面最大幅250cm、底面幅58cm、長さは2.3mまで計れた。断面形は上部で緩やかな傾斜を示し、下部は逆台形を呈している。堆積土は4層に大別されるが、いずれも酸化鉄を含む砂が主体となっている。この堆積土中より、ロクロを使用した土師器小片3点と須恵器片2点の計5点の遺物が出土した。

また、1・Ⅱ層中から土師器片4点、須恵器片1点(第6図)、近世から近代にかけての陶器小片が3点出土している。

〈まとめ〉

この調査区からは、平安時代の土師器・須恵器片を出土する溝跡が1条発見された。中世の富沢館跡隣接地であるがこれに関わる遺構・遺物とは断定できなかった。よってこの調査区は試掘調査のみで調査を終了した。



国		種		形		表	
図	号	種	別	種	別	内	外
1	1	1	1	1	1	1	1

第6図 No.1 鉄塔試掘調査区出土遺物

2. No.2 鉄塔試掘調査区

所在地 仙台市富沢字鍛冶屋敷前43-1 (標高15.8m)

現状 更地

調査期間 昭和60年8月27日～8月29日

調査面積 30㎡

〈基本層位〉

重機による盛土排除作業の結果、標高14.7mで旧水田耕作土面に達した。

基本層位は、深掘り区を入れ礫層を含めて7層に大別される。Ⅰ層は、旧水田耕作土で厚さ15～20cmの灰黄褐色シルト層である。Ⅱ層は水田床土であり、厚さ5cmでまばらに分布する。にぶい黄褐色を呈し、酸化鉄を多く含んでいる。Ⅲ層は後世の攪乱をうけておらず、厚さ20cmの暗褐色シルト質粘土層である。炭化物の混入が目立つ。Ⅲ層上面において遺構は検出されなかった。Ⅳ層以下は深掘りによる確認である。Ⅳ層は厚さ10～15cmのにぶい黄褐色の砂質粘土である。Ⅴ層は厚さ25～30cmの褐色の粘土層である。Ⅵ層は厚さ75～80cmの褐色の砂質シルト層であった。以下は礫層となっている。

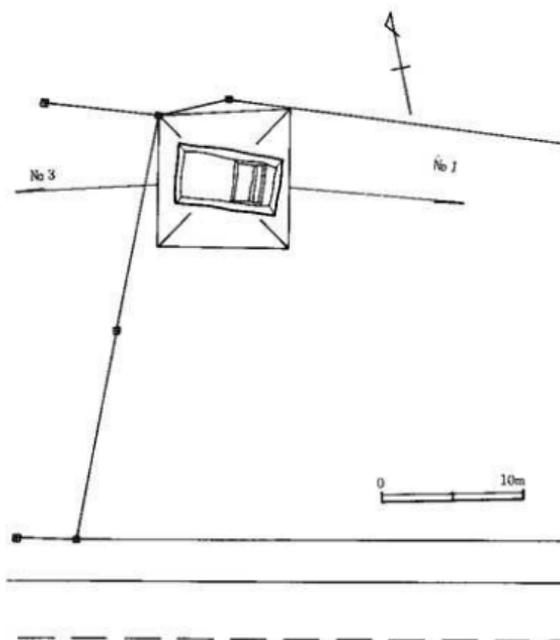
〈発見遺構・遺物〉

各層上面で遺構は検出されなかった。遺物はⅢ層中から内黒土師器片3点、縄文土器片1点出土したのみである。いずれも小片のため図化できたものはない。

〈まとめ〉

本調査区では、Ⅲ層上面及びそれ以下の層の上面で遺構がまったく発見されず、遺物もⅢ層中からの4点のみである。しかもこれらの遺物は他地点からの流入の可能性が高い。

富沢館跡の南側隣接地であったが、周辺に遺構等の存在する可能性は低いと判断し、試掘調査のみで調査を終了した。



第7図 No.2 鉄塔試掘調査区位置図

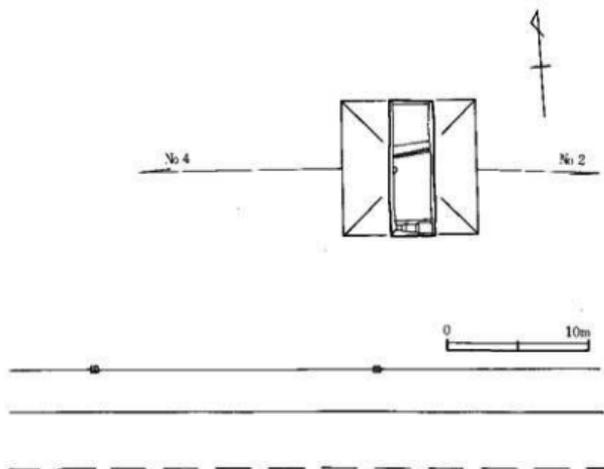
3. No.3 鉄塔試掘調査区

所在地	仙台市富沢字熊野前23-4 (標高16.4m)
現状	水田
調査期間	昭和60年10月14日～10月15日
調査面積	27.6㎡

〈基本層位〉

基本層位は、深掘り区と礎層を含めて8層に大別される。I層は現水田耕作土であり、厚さ25～30cmで2層に細分できる。いずれも粘土を主体としているが、I-a層は多量の酸化鉄を含んでいる。II層は調査区の南半部だけに分布している。厚さは20cmほどであり粘土を主体としている。3層に細分化できるが、II-a・b層は多量の酸化鉄を含んでいる。このII層も水

田耕作に関係している。Ⅲ層は灰黄褐色粘土層でしまりがある。上面は調査区の中央部より南側にむかって緩く下がっているが、ここから溝跡2条・土塚1基が検出された。以下の4層は深掘りによる確認で、Ⅳ層は厚さ20cmの灰黄褐色砂質粘土層、Ⅴ層も厚さ12cmのⅣ層と同色同質の堆積土であるが、若干砂分が多い。Ⅵ層は厚さ12cm、Ⅶ層は厚さ24cmで共に灰黄褐色の砂層である。以下は礫層となっている。



第8図 No.3鉄塔試掘調査区位置図

〈発見遺構・遺物〉

Ⅲ層上面より溝跡2条（1・2号溝跡）が、調査区の中央部やや北寄りの位置で検出され、また土塚1基（1号土塚）が調査区中央部西辺で検出された。

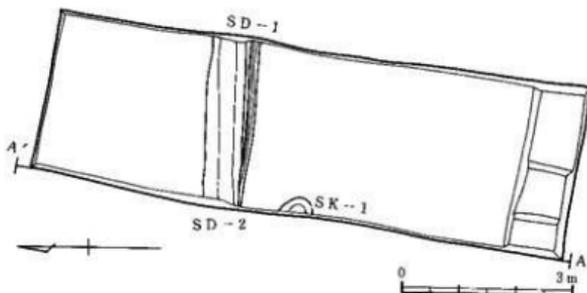
1号溝跡（SD-1）は東西方向にのびる。上面幅15cm、底面幅6cm、深さ6cmを計る溝である。断面形は浅いU字形を有しており、2号溝（SD-2）を切っている。堆積土は1層で遺物は出土しなかった。

2号溝跡（SD-2）は、1号溝とほぼ並行している。上面幅27cm、底面幅12cm、深さは35cmを計る。断面形は逆台形を呈し、堆積土は4層に分けられる。堆積土はいずれも黒褐色系の粘土を主体としている。土師器片6点が出土した。

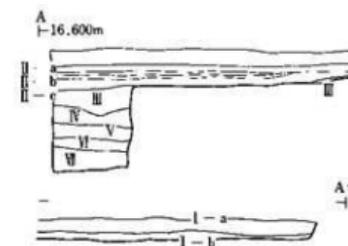
1号土塚（SK-1）は、調査区の西壁にかかっており確認できたのは遺構の東半部のみである。南北に56cm、東西は24cmまで計れた。断面形は浅い舟底形で深さは30cmである。堆積土は1層で、いぶい黄褐色の砂であった。遺物は出土しなかった。

(まとめ)

この調査区からは、平安時代の土師器片を出土する溝跡と時期不明の土壌が1基検出された。鍛冶屋敷A遺跡の東側隣接地であったが、前述の遺構・遺物以外に発見されたものはなく、試掘調査のみで調査を終了した。



第9図 No.3 鉄塔試掘調査区平面図



1号土壌 (SK-1)			
層No	土色	土性	その他
1	10Y R 列 灰黄褐色	粘土	

1号溝 (SD 1)			
層No	土色	土性	その他
1	10Y R 列 黄褐色	シルト	

層No	土色	土性	その他
I	10Y R 列 灰黄褐色	粘土	焼酎作土(水田)
II-a	10Y R 列 黄褐色	粘土	酸化鉄を多量に含む
II-b	10Y R 列 におい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガンを含む
II-c	10Y R 列 におい黄褐色	粘土	酸化鉄を多量に含む
II-d	10Y R 列 におい黄褐色	粘土	
III	10Y R 列 灰黄褐色	粘土	酸化鉄を多量に含む
IV	10Y R 列 灰黄褐色	砂質粘土	酸化鉄を多量に含む
V	10Y R 列 灰黄褐色	砂質粘土	百層より砂分多し
VI	10Y R 列 灰黄褐色	砂	
VII	10Y R 列 灰黄褐色	砂	
VIII	10Y R 列 におい黄褐色	シルト	腐食多量を含む

2号溝 (SD 2)			
層No	土色	土性	その他
1	10Y R 列 黄褐色	粘土	
2	10Y R 列 黄褐色	粘土	
3	10Y R 列 黄褐色	シルト質粘土	
4	10Y R 列 黄褐色	シルト質粘土	

第10図 No.3 鉄塔調査区西壁断面図

4. No.4 鉄塔試掘調査区

所在地 仙台市富田字京ノ北16-1 (標高18.1m)

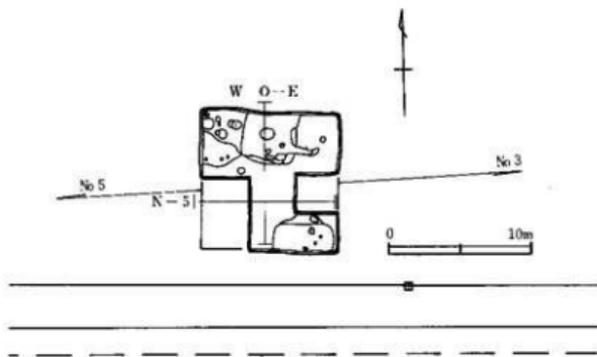
現状 水田

調査期間 昭和60年10月16日～10月24日

調査面積 29.8㎡ (本調査63.7㎡)

鍛冶屋敷A遺跡の西側隣接地にあたる。攪乱をうけていないIII層上面を検出したところ、調

査区の北辺部と南辺部に多量の土師器片を出土する遺構プランが確認された。いずれも竪穴住居跡と考えられたため、北西部15.6㎡、北東部10.9㎡、南東部7.4㎡の調査区拡張を行ない、本調査に移行することとした。調査の詳細は本調査の項で述べることにする。



第11図 No.4 鉄塔試掘調査区位置図

5. No.5 鉄塔試掘調査区

所在地	仙台市富田字京ノ北1・2 (標高19m)
現状	水田 (休耕地)
調査期間	昭和60年10月15日～10月16日
調査面積	24㎡

(基本層位)

基本層位は深掘り区を含め7層に大別される。Ⅰ層は水田耕作土であり、2層に細分できる。Ⅰ-a層は調査区南端部だけに分布し、厚さ10cmの灰黄褐色シルト層である。Ⅰ-b層は厚さ10～15cmのにおい黄褐色シルト層である。Ⅱ層も調査区南半部分のみに分布する。黄褐色の粘土質シルト層で厚さは7～10cmを計る。Ⅲ層はにおい黄褐色の粘土質シルト層であるが、マンガン含有量の多い部分と少ない部分で上下2層に分けられる。Ⅲ-a・b層とも厚さ10cmを計るが、Ⅲ-a層が調査区全体で確認されたのに対し、Ⅲ-b層は北半部だけに分布する。このⅢ層上面までに遺構が検出されなかったため、以下は深掘りを行なった。Ⅳ層は厚さ20～30cmの褐色シルト層である。Ⅴ層はにおい黄褐色シルト層で厚さは20～25cmである。Ⅵ層は厚さ30cm、暗褐色砂質シルト層であった。Ⅶ層は暗褐色の砂層である。ボーリング調査を行なった結果、この砂層は2m以上続くことが確認された。

(発見遺構・遺物)

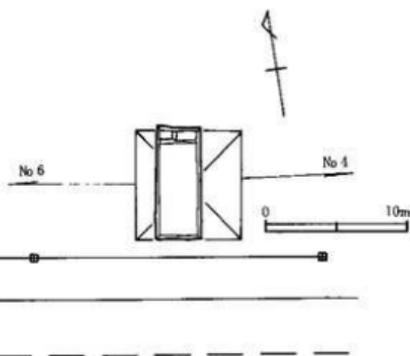
各層上面から遺構は検出されなかった。遺物はⅠ層中から土師器片2点、縄文土器片2点の

計4点、Ⅱ層中に土師器片3点、須恵器片1点の計4点が出土した。またⅢ層中からも土師器片2点が出土したが、いずれも小片で図化できなかったものはない。

〈まとめ〉

各層位上面から遺構は検出されず、出土遺物についても他からの流入と思われ、南ノ東遺跡の隣接地ではあるが、

周辺に遺構の存在する可能性は低く試掘調査のみで終了した。



第12図 No 5 鉄塔試掘調査区位置図

6. No 6 鉄塔試掘調査区

所在地	仙台市高田字八幡中60-1 (標高20.4m)
現状	水田
調査期間	昭和60年10月24日～10月25日
調査面積	16㎡

〈基本層位〉

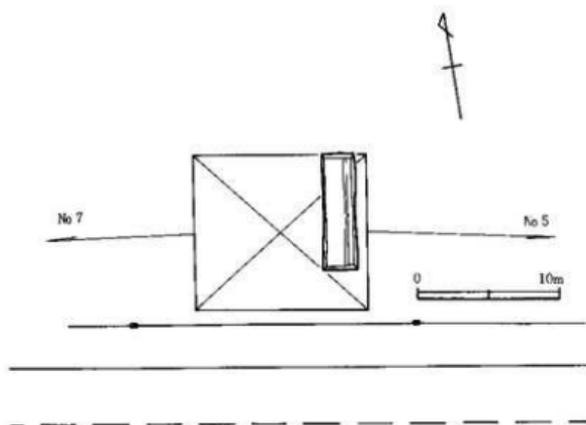
基本層位は礫層を含め5層確認される。Ⅰ層は現水田耕作土で、厚さ20cmの黒褐色粘土質シルト層である。Ⅱ層は水田床土で、黒褐色粘土質シルトで酸化鉄の混入が目立つ。厚さは5～6cmを計る。Ⅲ層は後世の攪乱をうけていない層である。褐灰色粘土質シルトが15cm堆積している。調査区南半部はこれ以下が礫層となっていた。Ⅳ層は調査区北半部のみ分布する。厚さ5cmほどの灰黄褐色粘土層である。これ以下は礫層となっている。また礫層は北に向けて緩く下がる傾向にある。

〈発見遺構・遺物〉

各層上面から遺構は検出されず、出土遺物もなかった。

〈まとめ〉

各層位上面から遺構は検出されず、出土遺物もない。南ノ東遺跡の北側隣接地であるが、周辺に遺構等の存在する可能性は低いと判断した。よって試掘調査のみで調査は終了した。



第13図 No 6 鉄塔試掘調査区位置図

7. No 7 鉄塔試掘調査区

所在地	仙台市富田字上野中129-3 (標高29m)
現状	史地
調査期間	昭和60年8月26日～8月29日
調査面積	24㎡

〈基本層位〉

厚さ50～60cmの現畑耕作土を排除したところ、暗褐色ローム層を検出した。

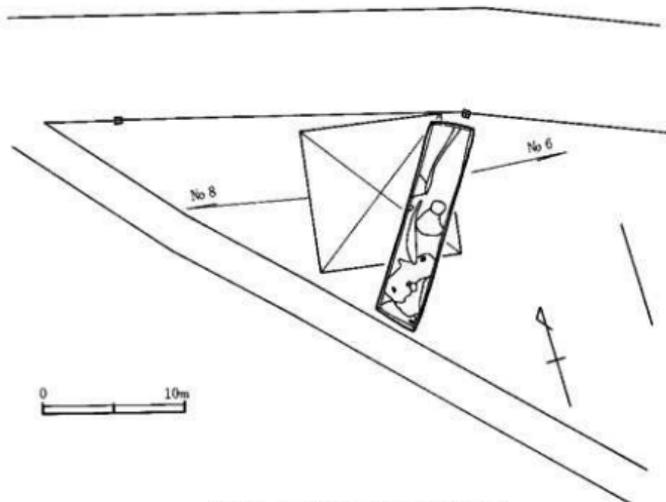
〈発見遺構・遺物〉

ローム層上面からは、焼土面3ヵ所をはじめ明らかに遺構とみられる黒色土の落ち込みが検出された。また耕作土中からは多量の縄文土器片が出土した。

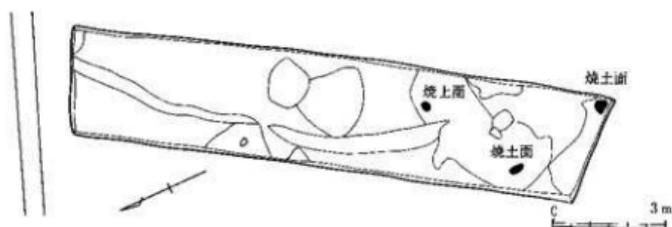
〈まとめ〉

この調査区は上野遺跡範囲内であり、上野地区丘陵部南東側緩斜面に位置する。昭和58年・60年に行なわれた市道十文字線工事に関わる発掘調査地点からは、東に約200mほど離れる。

出土した縄文土器片は、大木8a・8b式であり(第16・17図)、^(註3)焼土面などの存在を合わせ考えると、ここに縄文中期中葉頃の住居跡が存在する可能性が高い。よって本調査の必要があると判断した。調査は遺構検出面を保護する処置をとり、埋め戻すことで終了した。



第14図 No 7 鉄塔試掘調査区位置図



第15図 No 7 鉄塔試掘調査区遺構平面図

8. No 8 鉄塔試掘調査区

所在地 仙台市富田字上野西46-2 (標高32.8m)

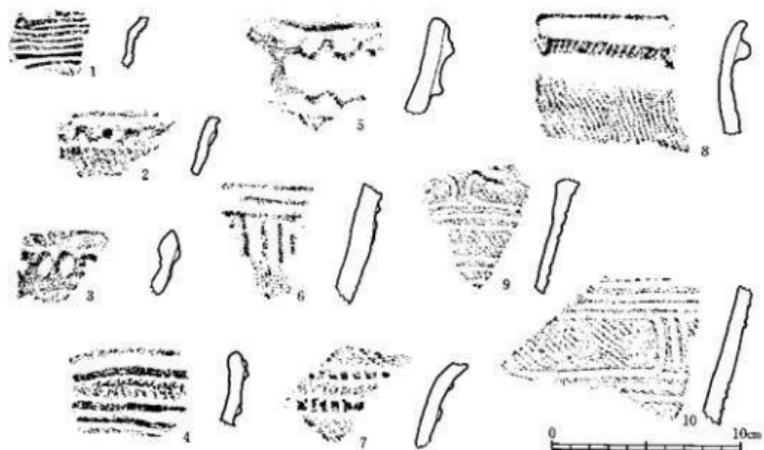
現状 更地

調査期間 昭和60年8月26日～8月27日

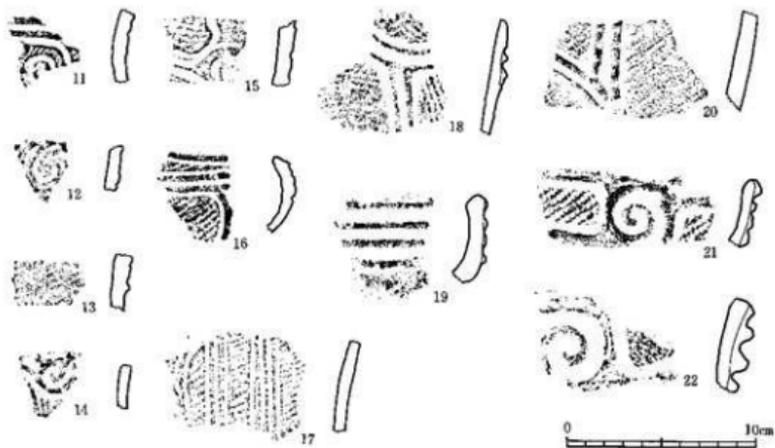
調査面積 26.3㎡

〈基本層位〉

80cmの盛土・旧耕作土を重機によって排除したが、ここで小礫を多量に含む褐色ローム層に到達した。



第16図 No.7調査区出土縄文土器その1(大木8 a式)



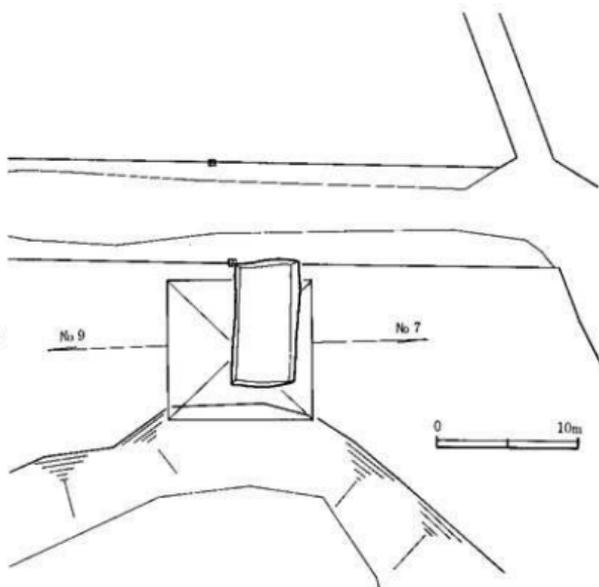
第17図 No.7調査区出土縄文土器その2(大木8 b式)

〈発見遺構・遺物〉

ローム層上面において遺構は検出されず、また出土遺物もなかった。

〈まとめ〉

この調査区は上野遺跡範囲内に位置するが、旧耕作土直下のローム層はかなりの深さまで削平されていた。よって遺構などが存在する可能性は低いと考え、試掘調査のみで調査を終了した。



第18図 No. 8 鉄塔試掘調査区位置図

9. No. 9 鉄塔試掘調査区

所在地 仙台市山田字新田掘下中29-3 (標高31m)

現状 水田

調査期間 昭和60年10月18日～10月23日

調査面積 22㎡

〈基本層位〉

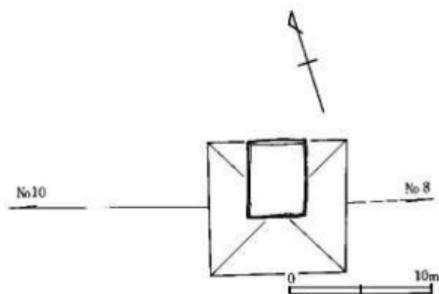
基本層位は礫層を含め4層に大別される。Ⅰ層は現水田耕作土で2層に細分された。いずれも灰黄褐色シルト層からなり酸化鉄を含む。Ⅰ-a層は調査区全体に存在し厚さ20cmを計る。Ⅰ-b層は厚さ5～6cmで調査区北端部のみに分布する。Ⅱ層は酸化鉄を多量に含む暗褐色シルト層で厚さは5～10cmを計る。調査区北端では分布しない。Ⅲ層は調査区北端部のみに存在し、多量の小礫を含む黒褐色シルト層が厚さ8cmほど分布する。以下は礫層となる。

〈発見遺構・遺物〉

各層上面から遺構は検出されず、出土遺物もなかった。

〈まとめ〉

この調査区は山田条甲遺構範囲内に位置するが、周辺に遺構等が存在する可能性は低いと判断し、試掘調査のみで調査を終了した。



第19図 No 9 鉄塔試掘調査区位置図

10. No10鉄塔試掘調査区

所在地	仙台市山田字谷地前44-1 (標高32.2m)
現状	水田
調査期間	昭和60年10月22日～10月23日
調査面積	25.8㎡

〈基本層位〉

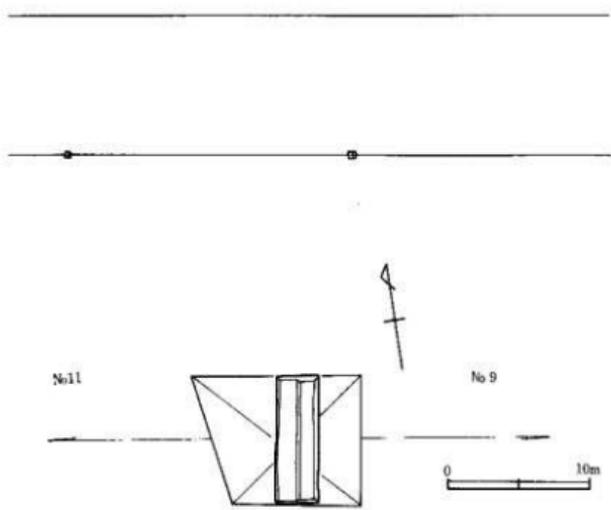
基本層位は礫層を含めて4層確認される。Ⅰ層は現水田耕作上で、厚さ10～15cmの灰黄褐色粘土質シルト層である。Ⅱ層は厚さ30cmの黒褐色粘土層で、下面が緩く波打っており耕作の手がここまで入った事を示す。Ⅲ層は5～15cmの厚さをもつ暗褐色シルト層である。以下は砂を含む礫層となる。

〈発見遺構・遺物〉

各層位から遺構は検出されず、出土遺物もなかった。

〈まとめ〉

この調査区は山田条里遺構の範囲内に位置するが、周辺に遺構が存在する可能性は低いと判断し、試掘調査のみで調査を終了した。



第20図 No.10鉄塔試掘調査区位置図

11. No.11鉄塔試掘調査区

所在地 仙台市山田字御殿9 (標高33.5m)
 現 状 水 田
 調査期間 昭和60年10月22日～10月23日
 調査面積 27㎡

(基本層位)

基本層位は礫層を含めて5層に大別できる。Ⅰ層は現水田耕作土で、厚さ20cmの灰黄褐色シルト層である。Ⅱ層は厚さ2～4cmの黄褐色粘土層で、酸化鉄を多量に含む水田床土である。Ⅲ層は厚さ10cmの灰黄褐色粘土層が堆積する。Ⅳ層は灰黄褐色シルト層である。この層は調査区北端から3mのところ、下層の礫層が盛り上がり南北に分断されている。厚さは8～10cmほどである。以下は礫層となる。

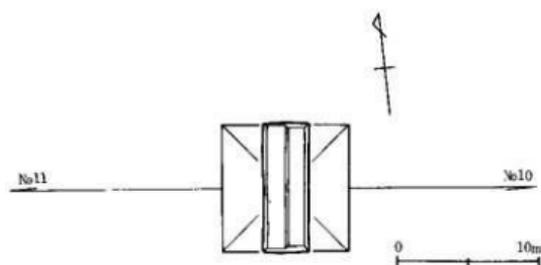
(発見遺構・遺物)

各層位上面から遺構は検出されず、遺物も出土していない。

(まとめ)

この調査区は山田条里遺構範囲内に位置しているが、周辺に遺構が存在する可能性は低いと

判断し、試掘調査のみで調査を終了した。



第21図 No.11鉄塔試掘調査区位置図

12. No.12鉄塔試掘調査区

所在地 仙台市山田字竹ノ内前16-1 (標高33.4m)

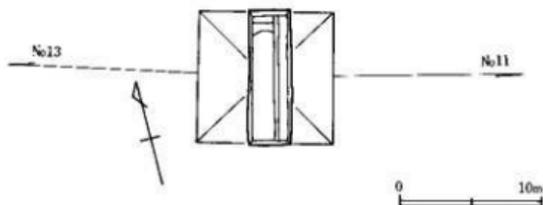
現状 水田

調査期間 昭和60年10月23日～10月24日

調査面積 27㎡

〈基本層位〉

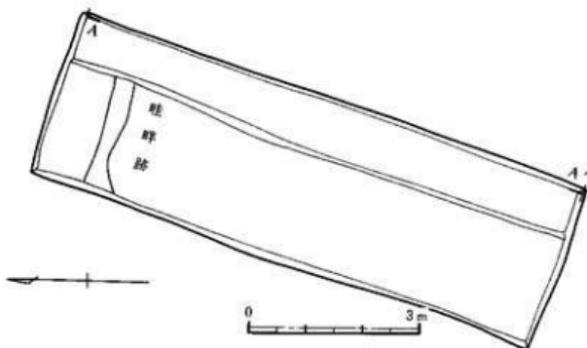
基本層位は礫層を含めて7層に大別される。Ⅰ層は現水田耕作土で、厚さ20cmの黒褐色粘土層である。Ⅱ層は厚さ2～5cmのふい黄褐色粘土層で、多量の酸化鉄を含む水田床土である。Ⅲ層は灰黄褐色粘土層が、調査区北部で25cm、南部で30cmほどの厚さで分布する。南半部では以下が礫層となる。Ⅳ層以下は北半部だけに分布する。Ⅳ層は厚さが最大で10cmほどの灰黄褐色粘土層で、酸化鉄を多量に含んでいる。Ⅴ層は厚さ30cmの粘土層で、2層に細分できる。Ⅵ層も厚さ10～20cmほどの粘土層で2層に細分される。以下は褐灰色の礫を多量に含む粘土層であり、北方に緩やかに下がっているのが確認された。



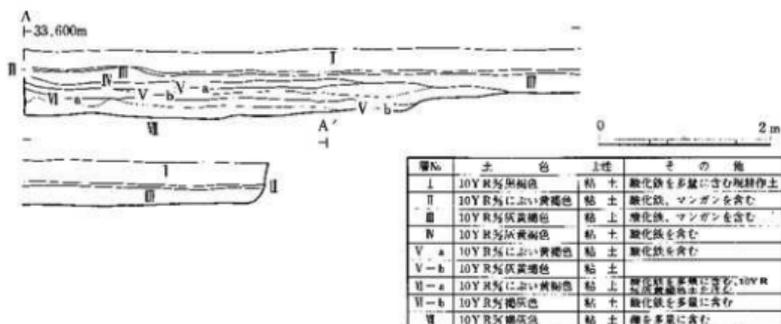
第22図 No.12鉄塔試掘調査区位置図

〈発見遺構・遺物〉

Ⅲ層上面北半部において、東西にのびる幅10cmほどの畦畔が検出された。残存高は最大で4～5cmほどである。出土遺物はなかった。



第23図 No.12鉄塔試掘調査区平面図



第24図 No12鉄塔試掘調査区東壁断面図

〈まとめ〉

この調査区からは、時期は不明であるが水田畦呼の存在が確認された。これは山田条里遺構内に位置し、竹ノ内前遺跡隣接地に位置する所から検出されたものであるが、両遺跡との関係は不明である。周辺に遺構の存在する可能性は低いと判断し、試掘調査のみで調査を終了した。

13. No13鉄塔試掘調査区

所在地 仙台市山田字穴ノ上前11-1 (標高34m)
 現 状 更 地
 調査期間 昭和59年9月11日
 調査面積 18㎡

〈基本層位〉

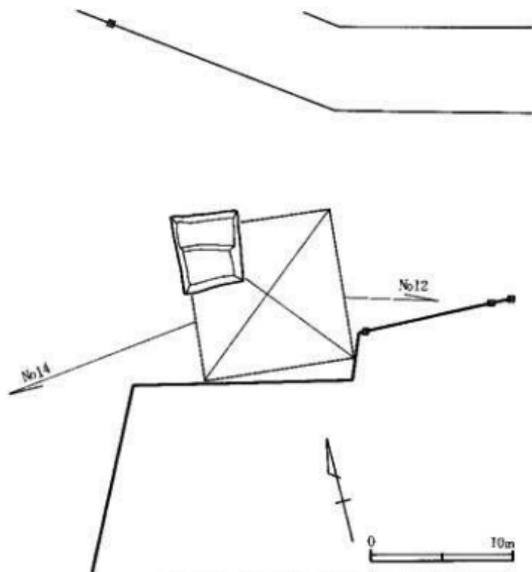
厚さ70cmほどの盛土を排除し、旧耕作土面を検出した。基本層位は3層に大別される。I層は旧耕作土で厚さは25~30cmを計る。2層に細分でき、I-a層は黒色シルト層、I-b層は黒褐色シルト層である。II層は厚さ5~6cmの暗褐色シルト層である。III層は黄褐色の砂層である。

〈発見遺構・遺物〉

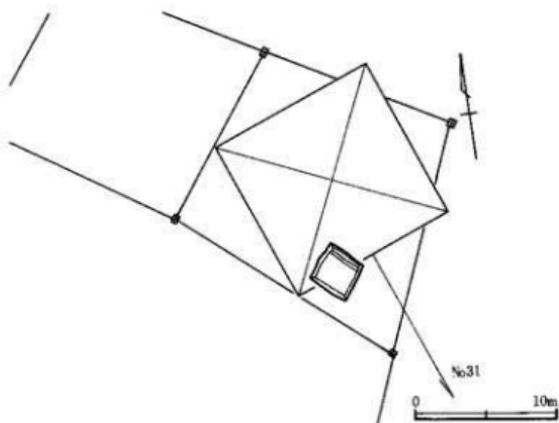
各層上面から遺構は検出されなかった。出土遺物はII層中からの土師器片2点のみである。

〈まとめ〉

この調査区は、山田条里遺構・竹ノ内前遺跡の隣接地に位置する。遺物が2点出土したが、周辺に遺構が存在する可能性は低いと判断し、試掘調査のみで調査を終了した。



第25図 No.13鉄塔試掘調査区位置図



第26図 No.32鉄塔試掘調査区位置図

14. No.32鉄塔試掘調査区

所在地	仙台市茂庭字大沢41-3 (標高62m)
現状	畑地
調査日	昭和59年9月17日
調査面積	9㎡

(基本層位)

基本層位は4層に大別される。Ⅰ層は現畑作耕作土で、厚さ10～15cmの暗褐色シルト層である。Ⅱ層も耕作によって攪乱をうけた黒褐色シルト層である。厚さは15～20cmほどを計る。Ⅲ層は厚さ10cmの褐色シルト層である。Ⅳ層は褐色の砂質シルト層となる。

(発見遺構・遺物)

各層位上面からは遺構がまったく検出されず、出土遺物もなかった。

(まとめ)

この調査区は、新組遺跡南東側隣接地に位置するが、ここに遺構が存在する可能性は低いと判断し、試掘調査のみで調査を終了した。

[2] 本調査

試掘調査の項で述べたとおり、No.4鉄塔試掘調査区で遺構の存在が確認されたため本調査に移行した。調査面積は63.7㎡、調査日数は延べ9日間である。

1. 基本層位

基本層位は3層に大別される。Ⅰ層は現水田耕作土で、厚さ10cmのいり黄褐色シルト層である。Ⅱ層は水田床土で、厚さ20cmの灰黄褐色シルト質粘土層であり、酸化鉄を多量に含む。Ⅰ・Ⅱ層中から、土師器片84点、須恵器片1点、陶磁器片5点が出土した。

Ⅲ層は、W-O-Eラインを境に東西で土質が異なっている。いずれも褐色を呈しているが、西半部のⅢ-a層は粘土層であり、東半部のⅢ-b層は砂礫層である。このⅢ層上面で遺構を検出した。

2. 発見遺構と遺物

Ⅲ層上面から、竪穴住居跡2軒(SI-1・2)、性格不明遺構3基(SX-2・3・4)、土壇1基(SK-1)、ピット4個が検出された。遺物は土師器片を中心に多数出土している。

層 号	上 色	土 質	そ の 他
I	10 Y R 5/6 に近い黄褐色	粘土質シルト	木田耕存土
II	10 Y R 5/6 黄褐色	シルト質粘土	水田床土
SX-2-1	10 Y R 5/6 黄褐色	粘土質シルト	土師器片、炭化物を多量に含む
S1-2-1	10 Y R 5/6 黄褐色	砂質シルト	土師器片、炭化物を多量に含む、灰白色大山成を含む
S1-2-2	10 Y R 5/6 黄褐色	粘土質シルト	土師器片、焼土、炭化物を含む、灰白色大山成を含む
イ	10 Y R 5/6 黄褐色	シルト質粘土	焼土、炭化物を少量含む
III-a	10 Y R 5/6 黄褐色	粘 土	
III-b	10 Y R 5/6 黄褐色	砂 礫	

第2表 No.4 鉄塔調査区土層註記表（北壁部）

(1) 竪穴住居跡

1号住居跡（S1-1）

〔平面形・保存状況・重複〕 調査区南部で、住居跡の北半部を検出した。南半部が調査区外にのびるため、全容は不明であるが、平面形は隅丸方形か隅丸長方形を呈すると思われる。重複は3号性格不明遺構（SX-3）を切っている。上半部は耕作によりかなり削平をうけていた。

〔規模〕 東西軸で4.05mを計る。南北軸は1.84m以上を計る。

〔方向〕 東西軸 N-92°-E 南北軸 N-2°-E

〔堆積土〕 堆積土は2層確認された。いずれも粘土層を主体としている。1層には焼土・炭化物の混入が目立つ。2層には小礫が多く含まれている。

〔壁・床面〕 基本層のIII-b層を壁としていた。最大残存壁高は9cm（北壁）である。壁の立ち上がりはゆるやかである。床面は多量の小礫を含む砂質であり、基本層III-b層に対応する。ほぼ平坦な状況を示し、しまりがある。径20～30cmの焼土面が3個検出された。

〔柱穴・周溝〕 床面でピットが1個確認されたが、柱穴である可能性は低い。周溝は検出されなかった。

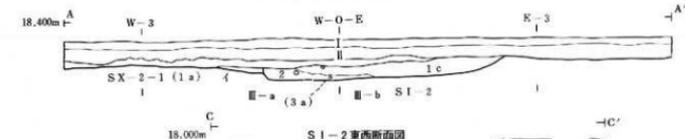
〔カマド〕 カマドは煙道とともに不明である。調査区外の南半部の壁部分に存在するものと考えられる。

〔遺物出土状況〕 堆積土中から、非ロクロ・ロクロ使用の土師器片が158点、須恵器片3点、縄文土器片が6点と赤焼土器片などが出土した。罔化できたものは、床面に正立する状態で出土した土師器杯1点・赤焼土器杯1点（第28図1・2）のみである。また土偶（第28図3）が床面から斜めに立つ状態で出土した。

2号住居跡（S1-2）

〔平面形・保存状況・重複〕 調査区北部で、住居跡の南半部を検出した。北半部が調査区外にのびるため全容は不明であるが、平面形は南北に少し長い隅丸長方形を呈すると思われる。

No 4 鉄塔調査区北壁断面図



S1-1土層剖記表

層号	土色	土質	その他
1	10Y R/灰褐色	シルト質粘土	焼土、炭化物、木屑層を含む
2	10Y R/灰褐色	粘土	多量の砂を含む

S1-1ピット観察表 (cm)

層号	P 1	P 2
深さ	20	27
底径	50	50
底径	20	20
深さ	8	
地質	砂質シルト	

S1-2土層剖記表

層号	土色	土質	その他
1	10Y R/灰褐色	粘土質シルト	SX-2-2層
1-1	10Y R/白黄褐色	シルト	土層厚、炭化物、灰白色土層を含む
1-2	10Y R/灰褐色	砂質シルト	土層厚、炭化物、灰白色土層を含む
2	10Y R/灰褐色	シルト	炭化物を少量含む
3a	10Y R/灰褐色	粘土質シルト	炭化物を多量に含む
3b	10Y R/灰褐色	シルト	炭化物を少量に含む
3c	10Y R/灰褐色	粘土質シルト	土層厚、焼土、炭化物を多量に含む
4	10Y R/白黄褐色	粘土質シルト	炭化物、焼土を多量に含む
5	10Y R/灰褐色	粘土質シルト	炭化物、焼土を多量に含む
6	10Y R/白黄褐色	砂質シルト	炭化物、焼土を多量に含む

S1-2ピット観察表 (cm)

層号	P 1	P 2	P 3
深さ	20	27	20
底径	50	50	50
底径	20	20	20
深さ	8		
地質	粘土質シルト	シルト	粘土

2号焼土遺構



SX-2-1号焼土遺構断面図

層号	土色	土質	その他
1	5Y R/灰褐色	シルト	焼土
2	10Y R/灰褐色	シルト	焼土、炭化物を含む
3	7.5Y R/灰褐色	粘土質シルト	炭化物を多量含む

SX-2-2号焼土遺構断面図

層号	土色	土質	その他
1	10Y R/灰褐色	粘土質シルト	7.5Y R/灰褐色、土層厚、炭化物、焼土を含む
2	10Y R/灰褐色	シルト質粘土	炭化物を多量に含む
3	10Y R/灰褐色	粘土	

SX-2-3号SK-1断面図

層号	土色	土質	その他
1	10Y R/灰褐色	粘土質シルト	焼土、炭化物を含む
2	10Y R/灰褐色	粘土質シルト	
3	10Y R/白黄褐色	砂	

SX-2-4号SK-2断面図

層号	土色	土質	その他
1	10Y R/灰褐色	シルト質粘土	土層厚、炭化物を含む

SX-2-5号SK-3断面図

層号	土色	土質	その他
1	10Y R/灰褐色	シルト質粘土	炭化物、土層厚を含む
2	10Y R/灰褐色	粘土	
3	10Y R/灰褐色	粘土	

SX-2-2ピット観察表

層号	P 1	P 2	P 3	P 4
深さ	34	42	40	57
底径	24	24	23	24
底径	9	11	11	26
地質	粘土質シルト	シルト	粘土質シルト	シルト

SX-3-1土層剖記表

層号	土色	土質	その他
1	10Y R/白黄褐色	砂質シルト	灰白色土層、炭化物、土層厚を含む
2	10Y R/白黄褐色	砂質シルト	砂が多い

SX-3-2号SK-1断面図

層号	土色	土質	その他
1	10Y R/白黄褐色	シルト	炭化物を含む
2	10Y R/白黄褐色	シルト	炭化物、焼土を含む
3	10Y R/白黄褐色	砂質シルト	

SX-4土層剖記表

層号	土色	土質	その他
1	10Y R/灰褐色	シルト質粘土	灰白色土層、炭化物、土層厚を含む

SX-4-2ピット観察表 (cm)

層号	P 1	P 2	P 3
深さ	17	24	20
底径	25	11	9
地質	粘土	粘土質シルト	粘土質シルト

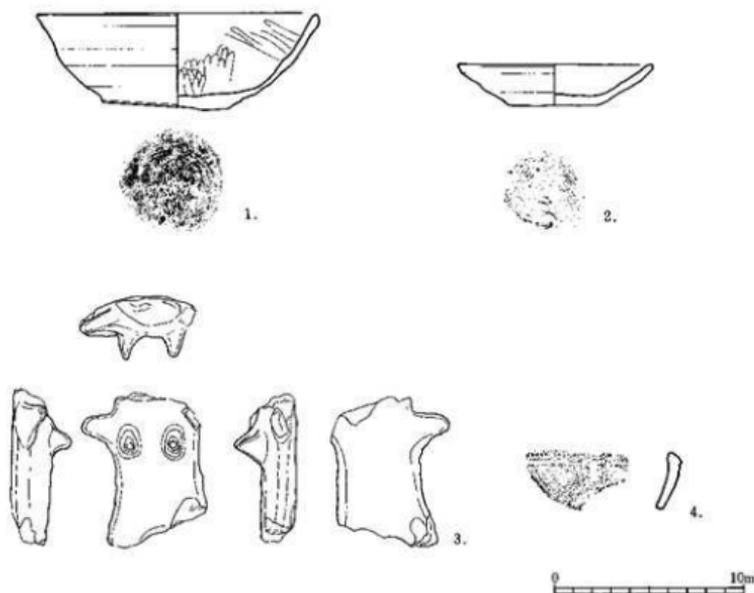
SK-1断面図

層号	土色	土質	その他
1	10Y R/灰褐色	砂質粘土	S1-2焼土
2	10Y R/灰褐色	砂質粘土	S1-2焼土
3	10Y R/灰褐色	粘土質シルト	
4	10Y R/白黄褐色	砂	焼土を含む
5	10Y R/白黄褐色	砂	焼土を含む

ピット観察表 (cm)

層号	P 1	P 2
深さ	42	40
底径	14	11
地質	粘土質シルト	シルト質砂

第27図 No 4 鉄塔本調査区遺構図



土器観察表 (cm)									
図番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口クロ切離し	口径	底径	高さ
28-1	土師器	洋	床	ロクロ	ヘウレキ	切離しあり	14.9	7.9	5.3
28-2	赤褐色土器	洋	床	ワケロ	ロクロ	切離しあり	11.5	4.8	2.2

土偶観察表 (cm)				
図番	種別	層位	全長	全幅
28-3	土偶	床	8.3	6.2
厚さ(胸部含む) 1.8(3.3)				

第28図 1号住居跡出土遺物実測図

重複は、2号性格不明遺構(SX-2)に上半部をかなり削平されている。また、2号性格不明遺構の1号土壇(SX-1)底部が床面を掘り抜いている。煙道部先端は1号土壇(SK-1)を切っている。

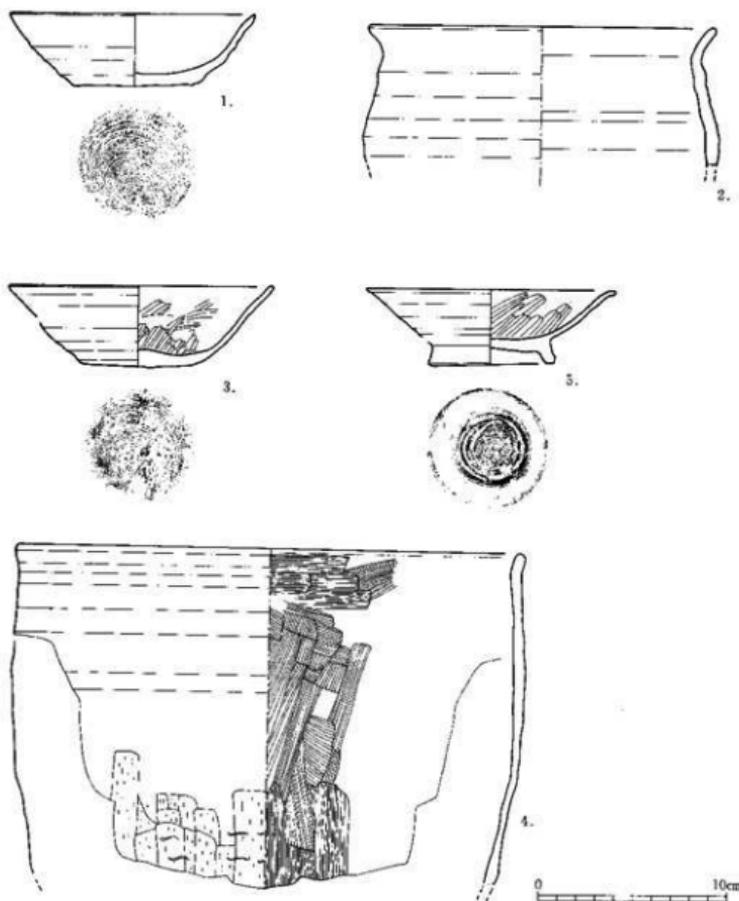
〔規模〕 東西軸で3.3mを計る。南北軸は3.4m以上を計る。

〔方向〕 東西軸 N-98°-E 南北軸 N-8° E

〔堆積土〕 堆積土は1a層が2号性格不明遺構堆積土であるため、実質、5層に大別される。いずれも粘土層を主体としているが、1b層・1c層・2a層には灰白色火山灰がブロック状に含まれている。床面直上の3c層は焼土・炭化物の混入が多い。

〔壁・床面〕 南壁西半部分と西壁は、基本層Ⅲ-a層を壁とし、南壁東半部分と東壁は基本層Ⅲ-b層を壁としている。最大残存壁高は34cm(南部)を計る。壁の立ち上がりはゆるやか

である。なお、東壁の一部で傾斜の緩い部分が確認された。床面は凹凸のない平坦な状況を示し、しまりがある。西半部はⅢ-a層、東半部はⅢ-b層に対応している。



図番	器例	器種	層位	壁			蓋		
				外形調整	内面調整	口クロ処理	口縁	蓋縁	器高
図1	土師器	鉢	3層	ロクロ	ヘラミダキ	陶糸染め切り	13	6.3	3.9
2	土師器	壺	3層	ロクロ	ロクロ	—	18.4	—	—
3	土師器	鉢	3層	ロクロ	ヘラミダキ	陶糸染め切り	14.1	5.5	4.3
4	土師器	甕	2層	ロクロ	ヘラミダキ	—	27	—	—
3	土師器	鉢	P2	ロクロ	ヘラミダキ	陶糸染め切り	13.2	6.6	4.1

第29図 2号住居跡出土遺物実測図

〔柱穴・周溝〕 南西隅角付近でピットが3個検出されたが、明確な柱穴は検出されなかった。周溝はない。

〔カマド〕 カマドは軸部分が左右とも残存していなかったが、東壁南東角より北に1.3mの位置で径30cmの焼土面が見つかり、ここがカマド部分と思われる。煙道の残存状況はよく焼土面から50cm南寄りの位置で東に向ってのびる。長さ199cm、幅45cmを計り、上軸線は4°南に傾いている。煙道底面には炭化物・焼土粒が堆積していた。

〔遺物出土状況〕 堆積土1層中から土師器片75点、須恵器片8点、3層中から土師器片58点、須恵器片21点を出土した。ここで図化できたものは、3c層中・床面出土の土師器環3点と土師器壺1点、甌1点である。(第29図) いずれも調整にはロクロを使用していた。

(2) 性格不明遺構

2号性格不明遺構(SX-2)

〔平面形・規模・重複〕 調査区北西拡張部で検出した。遺構の大部分が調査区外にのびており、確認できたのは長さ3.14mを計る南壁の一部と、調査区北壁断面(E-1.5)の東壁部分の立ち上がりだけである。よって平面形・規模ともに全容は不明である。重複は4号性格不明遺構(SX-4)と2号住居跡(SI-2)の上半部を切っている。

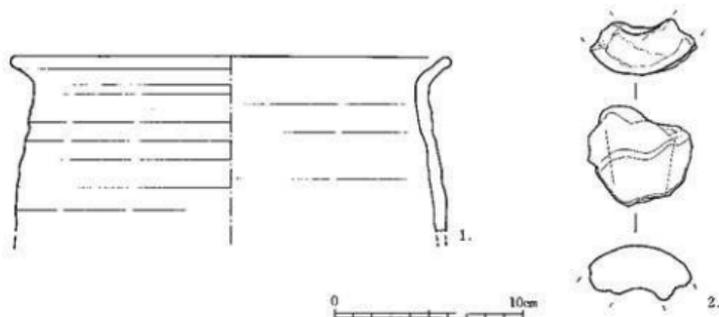
〔壁・底面〕 基本層Ⅲ-a層を壁としている。現存する南壁は最大高さ2~3cm、北西-南東方向に緩く蛇行しながらのびている。底面も基本層Ⅲ-a層に対応する。やや北側に向けて緩く下がっていくが、平坦でしまりがある。

〔堆積土〕 堆積土は1層である。暗褐色粘土質シルト層で、厚さは10~15cmを計る。炭化物の混入が目立つ。なお堆積土中から土師器片350点、須恵器片54点が出土した。小片が多く図化できたものは、ロクロ使用の土師器壺1点のみである。(第30図1) また、羽口1点(第30図2)、小鉄洋23点が出土している。

〔内部施設〕 底面から、焼土遺構2基(1・2号焼土遺構)、土壇3基(SX-2・SK-1~3)、ピット4個が検出された。以下に概要を述べる。

1) 1号焼土遺構

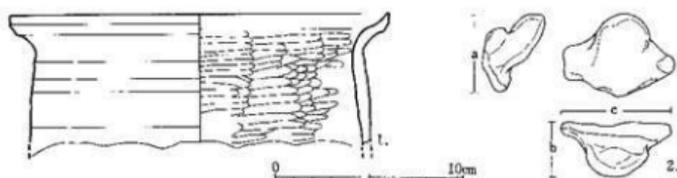
N-9、W-2の位置において、34×24cmの不整形を呈する明赤褐色焼土面が検出され、さらに焼土面下からは、浅い土壇状の掘り込みが確認できた。この掘り込みは平面形が楕円形を呈し、上端部径72×59cm、下端部径46×39cmを計る。断面形は舟底状を呈し、深さは10cm



観 察 表 (cm)									
図番	種別	巻数	層位	外面調整	内面調整	口ノロ切通し	口径	底径	器高
30-1	土師器	雙	1層	ロクロ	ロクロ	-	25.2		(B.2)

別 口 観 察 表 (cm)						
図番	種別	外径	孔径	特 徴		備 考
				外 面	内 面	
30-2	1層	7.6	2.6	-	-	破片

第30図 2号性格不明遺構堆積土出土遺物実測図



観 察 表 (cm)									
図番	種別	巻数	層位	外面調整	内面調整	口ノロ切通し	口径	底径	器高
31	土師器	雙	1層	ロクロ	ヘラミヤキ	-	30.2		(7.0)

図番	種別	a	b	c	備 考
31-2	土師器	3.3	5.8	4.4	柄取り部分

第31図 1号焼土遺構出土遺物実測図

を計る。壁・底面に凹凸が目立つが、焼け痕はなかった。

堆積土は焼土を含め3層に分けられる。1層は焼土部分、2層は焼土粒をまばらに含む暗褐色シルト層、3層は暗褐色粘土質シルト層である。

遺物は、1層焼土上面から土師器変片1点(第31図1)、甔(把手)片1点(第31図2)、小鉄滓6点が出土した。また3層からも土師器片4点、須恵器片3点が出土した。

なお、1号焼土遺構のすぐ北側に、径10cmの円形の焼土上面が検出された。特に、中央部分は径4~5cmの範囲で強く焼けている。

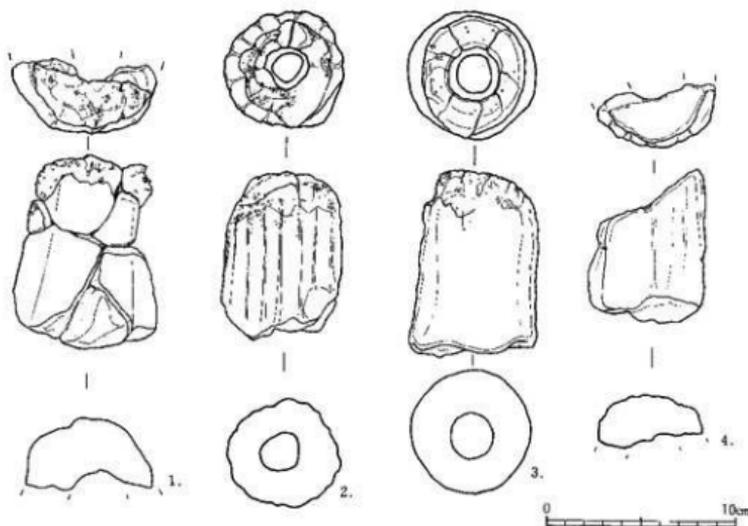
2) 2号焼土遺構

N-9・W-4の位置で、上面から羽口片を出土する土城状の遺構を検出した。

平面形は円形を呈し、上端径40cm、下端径25cm、断面形は浅い舟底状を呈し深さは8cmを計る。壁面・底面ともに黒褐色に焼けていた。

堆積土は粘土層を主体とし、3層に分けられる。1・2層は黒色で焼土粒・炭化物を多量に含む。3層は暗褐色を呈していた。

遺物は、1層上面から羽口が4点(第32図1~4)須恵器片1点、1層中から土師器片3点が出土した。特に羽口1は遺構南西端から小片に分かれて出土し、羽口2~4は遺構南西部からまとまって出土している。羽口2・3は保存状態が比較的良好で、横倒しとなっており2は先端部を東に向け、3は先端部を遺構中心部に向けていた。



図番	層位	外径	孔径	特 徴		備 考
				外 面	内 面	
32-1	1層	7.8	2.9	鉄滓付着	磁方向の微痕	破片
2	1層	6.3	2.1	鉄滓付着、多量あり	磁方向の微痕	先端部
3	1層	6.4	2.2	鉄滓付着	磁方向の微痕	先端部
4	1層	7.1	3.3		磁方向の微痕	破片

第32図 2号焼土遺構出土羽口実測図

3) 1号土城(SK-1)

N-7.5、W-O-Eの位置で検出した。長軸98cm、短軸75cmの楕円形を呈している。断面形はU字形を呈し、深さは48cmを計る。2号住居跡床面を掘り抜いている。

堆積土は3層に分けられ、1・2層は黒褐色粘土層、3層にはよい黄褐色の砂層が堆積している。

遺物は、2・3層理面から土師器壺1点(第33図)をはじめ、1層中から土師器片38点が出土している。

4) 2号土塚(SK-2)

N-7.5、W-3の位置で検出した。長軸77cm、短軸69cmの楕円形を呈する。断面形は浅い舟底状を呈し、深さは15cmを計る。ピット1に切られている。

堆積土は1層で、多量の炭化物を含む暗褐色粘土層である。

遺物は、堆積土中から土師器片32点を出土したが、図化できたものは、土師器壺2点・甌1点と灰彩陶器片1点の計4点である。(第34図1~4)土師器甌・土師器壺2は調整にロクロが使用されていたが、土師器壺3はロクロを使用していない。

5) 3号土塚SK-3

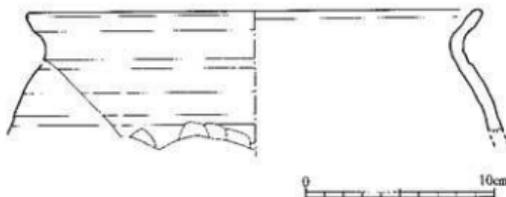
N-8.5、W-4の位置で検出した。遺構西端部は調査区外にのびる。平面形は長軸88cm、短軸83cmの楕円形を呈すると思われる。断面形は浅い舟底状を呈し、深さは12cmを計る。

堆積土は暗褐色の粘土層を主体とし、3層に細分できた。1層に炭化物の混入が目立つ。

遺物は土師器片4点が出土した。

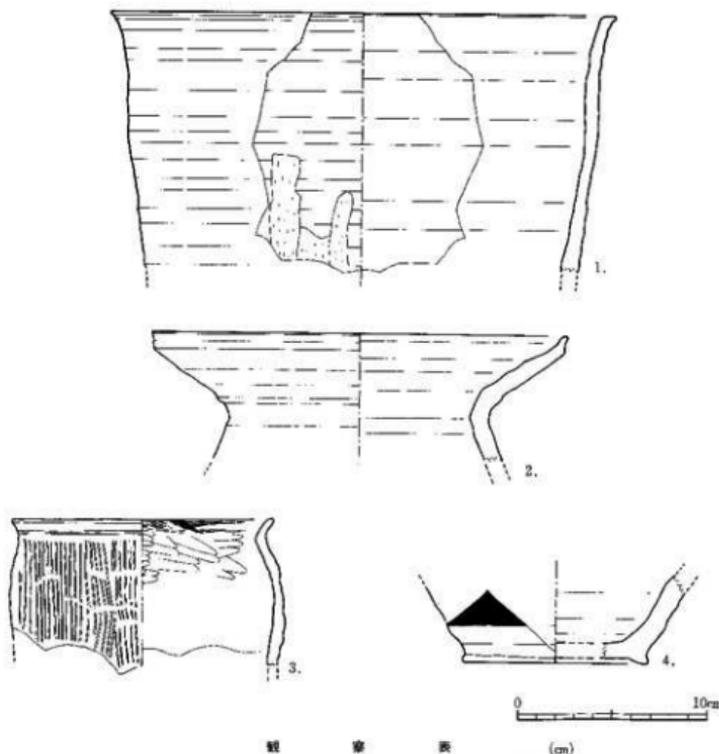
6).ピット(SX-2・P1~4)

ピットは4個検出された。ピット2・3からは土師器片が2点ずつ出土した。



図名		図例		断面調査		ロクロ切痕		口縁		直径		高さ	
図名	種別	図例	断面	外周調査	内周調査	ロクロ切痕	ロクロ切痕	口縁	直径	高さ	直径	高さ	
33	土師器	壺	1層	ロクロ	ロクロ	-	24.1	5.5					

第33図 2号性格不明遺構、SK-1出土遺物実測図



図番	種別	器種	層位	外径測定	内径測定	口径測定	口径	底径	高さ
34-1	土製器	甕	1層	ロクロ	ロクロ	-	-	-	(13.8)
2	土製器	甕	1層	ロクロ	ロクロ	-	22.2	-	(6.7)
3	土製器 (土ロクロ)	甕	1層	ハナ目	ヘラ削	-	13.8	-	(7.8)
4	土製陶器	甕	1層	ロクロ	ロクロ	-	-	9.8	(4.8)

第34図 2号性格不明遺構、SK-2出土遺物実測図

3号性格不明遺構 (SX-3)

〔平面形・規模・重複〕調査区南東拡張部で検出した。1号住居跡(SI-1)に南半部を削平されており、北東-南西方向の西壁の一部と、北西-南東方向の東壁の一部が残存するのみである。壁の方向からN-2.5・E-3付近の調査区外地点で両壁は接するものと思われ、平面形は方形か長方形を呈すると考えられる。残存する西壁部は1.55m以上、東壁部は0.98m以上を計る。

〔壁・底面〕 両壁ともⅢ-b層を壁面としている。最大残存高は東壁部で11cmを計る。壁は底面から緩やかに立ち上がっている。底面はⅢ-b層に対応している。凹凸もなく平坦な状況を示すが、南に向けて緩やかに下っている。

〔堆積土〕 堆積土はベルト部分で厚さ12cmを計り、2層に細分できる。両層とも砂分の多いシルト質土である。堆積土中からは土師器片32点が出土した。

〔内部施設〕 東壁底面部分において、長軸75cm、短軸38cmの楕円形を呈する土壇が1基検出された。(SK-1) 断面形は舟底形で、深さ20cmを計る。

堆積土は3層に細分された。各層とも砂分の多いシルト質土である。1・2層には焼土粒・炭化物の混入がみられる。遺物は土師器片が8点出土した。

4号性格不明遺構 (SX-4)

〔平面形・規模・重複〕 調査区北西拡張区で検出した。上半部はそのほとんどを耕作によって削平されており、また遺構北半部を2号住居跡(SI-2)と2号性格不明遺構(SX-2)に切れ、保存状況は良くない。残存するのは長さ2.96mを計る南壁の一部だけであり、平面形・規模ともに不明である。

〔壁・底面〕 残存する南壁は、N-5.5、W-3の位置で144°の角度をもって曲折している。最大残存高は2～3cmであり、Ⅲ-a層を壁面としている。底面もⅢ-a層に対応し、平坦でしりがある。

〔堆積土〕 堆積土は1層である。灰白色火山灰を含む褐色シルト質粘土層である。遺物は土師器片40点、須恵器片1点を出土している。

〔内部施設〕 底面からピットを3個検出した。出土遺物はない。

(3) 1号土壇 (SK-1)

〔平面形・断面形・規模・重複〕 N-6.5、E-3の位置で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸75cm、短軸40cmを計る。断面形は舟底形で、深さは18cmである。重複は2号住居跡(SI-2)煙道煙出し部分に切られている。

〔堆積土〕 ベルト部分で5層に細分されたが、1・2層は2号住居跡煙道部分の堆積土であるため、堆積土は3層である。いずれも砂層を主体としている。出土遺物はなかった。

(4) ピット (P1-2)

調査区北東・北西両拡張部分で1個ずつ、計2個のピットが検出された。ピット1から土師器片3点、ピット2から土師器片1点が出土している。

3. 遺物・遺構の総括

(1) 遺物の総括

No4本調査区の出土遺物は、土師器を中心に須恵器・灰軸陶器、羽口、鉄滓などであり、さらに少数の縄文土器、土偶などが含まれている。

出土遺物の全体量は、遺物収納用コンテナで約5箱分であった。

① 土師器

土師器はもっとも出土量が多かった。しかし、細片が多く図化できたものは環4点、甕6点の計10点と、甌(把手部分含)3点だけである。

—環—

図化できた4点は、すべて底部に回転糸切り痕を有し、外面は口縁部から体部下端までクロ調整を施されている。

〈環—1 1号住居跡から出土し第28図1に図示したものである。口径14.9cm、底径7.9cm、器高5.2cmを計る。内湾する体部上半はやや内厚を呈する。内面調整はヘラミガキされ、黒色処理をうけている。

〈環—2 2号住居跡から出土し第29図1に図示したものである。口径13cm、底径6.3cm器高3.9cmを計る。体部は底部から丸みをもって立ち上がり口縁端部はわずかに外反している。内面調整はヘラミガキを使用し、黒色処理をうけている。

〈環—3 2号住居跡から出土し第29図3に図示したものである。口径14.1cm、底径5.8cm、器高4.3cmを計る。体部は底部より内湾するように立ち上がるが、途中から口縁端部にかけて外反する。内面調整はヘラミガキされ、黒色処理をうけている。

〈環—4 2号住居跡のピット2から出土し第29図5に図示したもので高台付環である。口径13.2cm、底径6.6cm、器高は高台部を含め4.1cmを計る。高台は付高台であり、ハの字上に外方へ張り出している。体部は底部より緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部では外反する。内面調整はヘラミガキを施され、黒色処理をうけている。

環1～4は、いずれもその特徴から表杉ノ入式期に属する。よって時期は平安時代と考えられる。

—甕—

図化した甕6点は、すべて口縁部から体部にかけてのもので底部を欠損している。

〈甕—1 2号住居跡から出土した。第29図2に図示したものである。口径は18.4cmを計る。

体部は口径より若干広く最大径19cm程である。口縁部と体部の境いはくびれており、口縁部は外反している。調整は内外面ともロクロを使用している。

〈装〉－2 2号性格不明遺構から出土した。第30図1に図示したものである。口径23.2cmを計る。口縁部と体部の境いはくびれており、口縁部は外反している。調整は内外面ともにロクロを使用している。

〈装〉－3 2号性格不明遺構の1号焼土遺構中から出土した。第31図1に図示したものである。口径20.2cmを計る。体部がやや内傾しながら立ち上がり口縁部との境はくびれている。口縁部は短く外反し、端部は直立する。調整は内面がヘラミガキ、外面はロクロを使用している。

〈装〉－4 2号性格不明遺構の1号土壇から出土した。第33図に図示したものである。口径は24.1cmを計る。口縁部と体部の境はくびれ、口縁部は短く外反する。内外面とも調整にはロクロを使用している。

〈装〉－5 2号性格不明遺構の2号土壇から出土した。第34図2に図示したものである。口径は22.2cmを計る。体部から口縁部にかけては「く」の字状にくびれ、口縁部はやや長く外反し、口縁端部が直立する。調整は内外面ともロクロを使用している。

〈装〉－6 2号性格不明遺構・2号土壇から出土した。第34図3に図示したものである。口径13.8cmを計る。体部径はそれより若干広く最大径14.5cmほどを計る。口縁部から体部にかけてくびれており、口縁部は短く外反する。調整はロクロを使用しておらず、外面は口縁部ヨコナデ、体部ハケ日調整が施されている。内面は口縁部ヘラナデ、体部ナデ調整である。

以上6点の装の中で、1～5はロクロ使用から表杉ノ入式期に属するものである。6に関しても、他遺跡においてロクロを使用した表杉ノ入式土器と供伴するものに類似している。よって6点すべては、平安時代のもと考えられる。

一 瓶

2号住居跡出土の第29図4に図示した遺物と、2号性格不明遺構の2号土壇から出土した第34図1の遺物は、体部から口縁部にかけてほぼ直立して立ち上がっている。この器形から、これらの遺物は瓶と考えられる。いずれも口縁部がわずかに外反しているが、体部との境は明瞭でない。第29図4は口径27cmを計り、内面がヘラナデ調整、外面はロクロ調整が施されている。外面下部にはヘラケズリ痕がみられる。第34図1は口径が推定で26.6cmを計り、内外面ともロクロ調整が施されている。これも外面下部に一部ヘラケズリ痕がみられる。

また、2号性格不明遺構の1号焼土遺構中から、第31図2に図示した瓶の把手部分と考えられる破片が1点出土している。

以上3点の瓶と思われる土器も、供伴する遺物から表杉ノ入式期に属し、平安時代のも

考えられる。

② 赤焼土器・坏

1号住居跡から出土し第28図2に図示したものである。内面調整がロクロで 黒色処理をうけていないことから赤焼土器とした。口径14.9cm、底径7.9cm、器高5.2cmを計り、口径・底径の割りに器高が低く小皿状を呈している。供伴する土師器から平安時代と思われる。

③ 須恵器

須恵器は、2号性格不明遺構から比較的多く出土したが、ほとんどが小片であったため図化できたものはなかった。時期は共伴する土師器から平安時代と考えられる。

④ 灰釉陶器・甕

2号性格不明遺構の2号土壇から1点出土した。第34図4に図示したが残存するのは底部から体部にかけての破片である。底径9.8cmを計り、高台が付いている。調整は内外面ともロクロを使用し、底部には回転糸切り痕を有する。体部下端から底部周辺に貼り付けられた高台は外側に張り出し、断面形は三角形を呈している。内面・外面ともに灰白色を呈し、外面底部から1.5cm以上の高さに灰釉がかけられている。時期は共伴する土師器から表杉ノ式期に属し、平安時代と考えられる。

⑤ その他の土製品

— 縄文土器片・土偶 —

縄文土器片・土偶とも1号住居跡からの出土である。縄文土器片は文様がほとんど摩滅しており、拓本がとれたものは深鉢口縁部1点である。(第28図4) これはLR縄文が施され、口縁部に平行な沈線と、沈線間の刻み目から晩期(大洞口式)のものと思われる。^(註5)

土偶は床面からの出土である。(第28図3) 頭部・左腕部・両足部が欠損していた。全長8.3cm、全幅6.2cm、厚さ1.8cmを計るが、胸部は1.5cmほど突出している。全体に胴長で偏平な体型は、伊古田遺跡出土の土偶に類似しており、縄文時代後期中葉頃のものと思われる。^(註6)

— 羽口 —

2号性格不明遺構の堆積土中から1点(第31図2)、2号焼土遺構から4点(第32図1~4)の計5点が出土した。特に2号焼土遺構出土の羽口2・3は比較的保存状態が良かった。

羽口2は外径6.3cm、孔径2.1cm、残存長17.7cmを計る。外面には深さ0.1~0.2cmの縦溝が0.4~1cm間隔で入っている。先端部には溶解し細かい気包孔を有する鉄滓が、先端から3~3.5cmの範囲で最大厚0.5cmほど付着していた。孔径面には、羽口製作過程で棒状のものを芯として使用した痕跡であると思われる数条の擦痕が縦方向に入っていた。

羽口3も外径6.4cm、孔径2.2cm、残存長19.8cmを計り、羽口2とほぼ同じ大きさである。外面に羽口2のような溝は認められなかったが、孔径面にはやはり縦方向に数条の擦痕がみら

れた。先端部にはこれも溶解した気包孔を有する鉄滓が付着していた。

なお、2号焼土遺構出土羽口1も先端部に鉄滓が付着している。

これら羽口の出土は鍛冶作業場の存在を考えさせる。^(註7・8) 时期的には、表杉ノ入式期の土師器が
供伴していることで、平安時代と考えられる。

⑥ 鉄滓

2号性格不明遺構から計29点出土した。いずれも茶褐色を呈し最大のもので径約5cmを計る。

(2) 遺構の総括

① 竪穴住居跡

竪穴住居跡は2軒検出された。両住居跡とも互いに類似する表杉ノ式期に属する土師器等を出土し、平安時代のもと思われるが、堆積土中に灰白色火山灰を含む2号住居跡は时期的に古いとも思われる。両住居跡ともに形状・規模は明確にできなかったが、1号住居跡は1辺約4mの方形または南北に長短のある長方形、2号住居跡は東西約3mで南北にそれより若干長い長方形を呈すると考えられる。両住居跡から柱穴は検出されず、床面にも周溝・貯蔵穴といった施設もなかった。数個の性格不明のピットが検出されただけである。

カマド・煙道は2号住居跡でのみ検出された。東壁中央部より南寄りの位置に布設されていた。また、1号住居跡床面から3個の焼上面が検出されている。炉跡とも考えられるが性格は不明である。

② 性格不明遺構

2号性格不明遺構は、2号住居跡を切り、表杉ノ入式期に属する土師器等を出土することから10世紀前半以降の平安時代のものである。遺構は、大部分が調査区外に存在し、また上半部を後世の耕作などによってほとんど削平されているため、形状・規模ともに不明である。

内部施設としては2基の焼土遺構をはじめ、土壇・ピットなどがある。1号焼土遺構は地面を浅く掘り窪め、粘土質土や焼土粒・炭化物を含むシルト土を埋め戻し、その上面で火を使用した炉跡である。焼土中から小鉄滓を出土しており鍛冶に関係すると思われる。2号焼土遺構も炉跡であるが構造が異なり、粘土質の地面を浅く掘り窪めその窪みの中で火を使用している。特筆されるのは羽口を4個体出土しなんらかの送風施設を有していたと思われる点である。

羽口の中には先端部に鉄滓が付着しているものもあり、1号焼土遺構同様に鍛冶に関するものと考えられる。

よって性格不明遺構として捉えてきたこの遺構は、2基の炉跡の時期差と関係、他の内部施設である土壇・ピットなどの用途が不明のままではあるが、鍛冶作業場であった可能性が大(註8)きい。

3号性格不明遺構は、その大部分を1号住居跡に切られている。表杉ノ入式期に属する土師器片を出土することから、時期は住居跡よりも古い平安時代と考えられる。内部施設は土壇1基を有していた。形状は方形か長方形を呈すると考えられ、住居跡の可能性もあったが断定はできなかった。

4号性格不明遺構は、形状・規模ともに不明である。出土遺物、堆積土中に灰白色火山灰を含むことから平安時代に属しているもので、住居跡よりやや古い時期のものと考えられる。

③ 土壇

土壇は1基検出された。出土遺物はなく性格は不明である。時期的には2号住居跡煙道先端部に切られており、住居跡より以前のものと考えられる。

④ ピット

2個検出された。性格は不明である。時期的には出土遺物から平安時代のものと考えられる。

4. まとめ

- 1) 本調査区からは、竪穴住居跡2軒、鍛冶作業場跡1基(2号性格不明遺構)・土壇1基ピット2個などが発見された。
- 2) 発見遺構中、竪穴住居跡、鍛冶作業場跡、ピットは平安時代のものである。
- 3) 出土遺物としては、縄文土器、土偶、平安時代の土師器、須恵器、赤焼土器、灰積陶器、羽口、鉄滓、近代以降の陶磁器がある。量的に多かったのは平安時代(表杉ノ入式期)の土師器であった。
- 4) 本調査結果から、この調査区周辺には平安時代の鍛冶作業場を含む集落跡が存在する可能性が高い。今後の課題としては、この集落跡の範囲・規模の確認と、東側に隣接する鍛冶屋敷A遺跡との関係を明確化することなどがあげられる。

〈註 記〉

- 註1 佐藤甲二、素野裕彦他「茂庭」仙台市文化財調査報告書第45集 (1983)
仙台市教育委員会
経済企画庁「地形、表層地質、土じょう、仙台」(1967)
- 註2 篠原信彦、吉岡恭平他「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ・Ⅳ」(1985・1986)
「仙台市文化財調査報告書第69・82集 仙台市教育委員会
- 註3 仙台市教育委員会「仙台市上野縄文時代集落遺跡発掘調査説明会資料」1983 他
-第1回仙台市青少年文化財講座- 仙台市教育委員会
- 註4 金森安孝、工藤哲司「鴻ノ巣遺跡」仙台市文化財調査報告書第32集 他
仙台市教育委員会
- 註5 佐藤達夫編 「日本考古学選集」21「山内清男集」 築地書館 1985
- 註6 高橋勝也『伊古田遺跡』註2概報Ⅳに同じ
- 註7 註1「茂庭」より『嶺山C遺跡』
- 註8 和島誠一『製鉄技術の展開、宮城県深谷遺跡』「日本の考古学Ⅵ」河出書房1967
長島栄一、青沼一民「中田畑中遺跡」仙台市文化財調査報告書第53集
仙台市教育委員会
- 註1、7に同じ

〈参考文献〉

- 中出高・大槻憲四郎・今泉俊文 「仙台平野西線、長町一利府線に沿う新时期地殻変動」
東北地理第28巻第2号別刷 (1976)
- 白鳥良一 「多賀城跡出土土器の変遷」 研究紀要Ⅵ (1980) 宮城県多賀城跡調査研究所

図版 4

No.1 鉄塔試掘調査区
全景 (南より)



図版 5

No.1 鉄塔試掘調査区
SD-1 断面
(南より)



図版 6

No.2 鉄塔試掘調査区
全景 (東より)





図版 7

No 3 鉄塔試掘調査区
全景 (南西より)



図版 8

No 5 鉄塔試掘調査区
全景 (南より)



図版 9

No 6 鉄塔試掘調査区
全景 (南より)

図版10

No.7 鉄塔試掘調査区
全景（北より）



図版11

No.8 鉄塔試掘調査区
全景（北より）

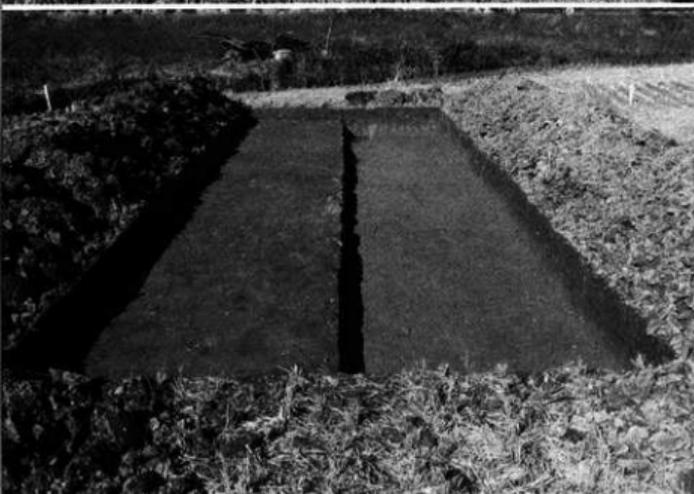




図版12
No.9 鉄塔試掘調査区
全景 (西より)



図版13
No.10鉄塔試掘調査区
全景 (南より)



図版14
No.11鉄塔試掘調査区
全景 (南より)

図版15

No12鉄塔試掘調査区

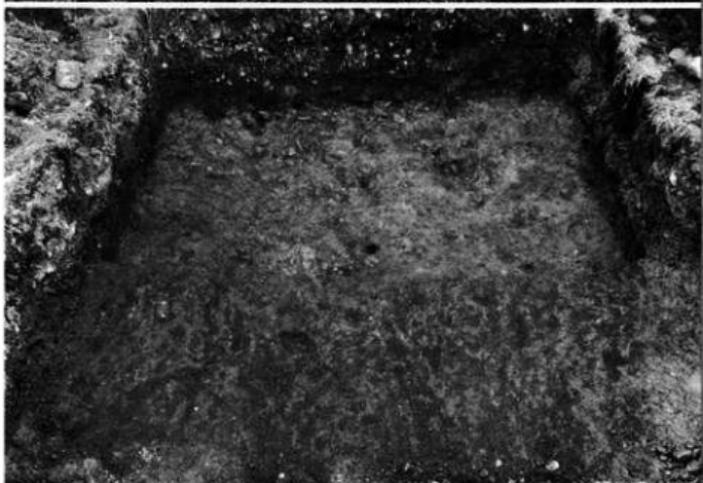
全景 (南より)



図版16

No13鉄塔試掘調査区

全景 (北より)



図版17

No32鉄塔試掘調査区

全景 (南より)





図版18 No.4 鉄塔本調査区全景 (西より)



図版19 No.4 鉄塔本調査区北壁断面

図版20

1号住居跡全景
(北西より)



図版21

1号住居跡
土偶出土状況
(西より)



図版22

2号住居跡全景
(西より)





図版23

2号・4号性格不明遺構
全景（南より）



図版24

2号性格不明遺構
1号焼土遺構
（西より）



図版25

2号性格不明遺構
1号焼土遺構断面
（西より）

図版26

2号性格不明遺構
1号焼土遺構完掘
(南西より)



図版27

2号性格不明遺構
2号焼土遺構
羽口出土状況
(東より)



図版28

2号性格不明遺構
3号焼土遺構断面
(北より)



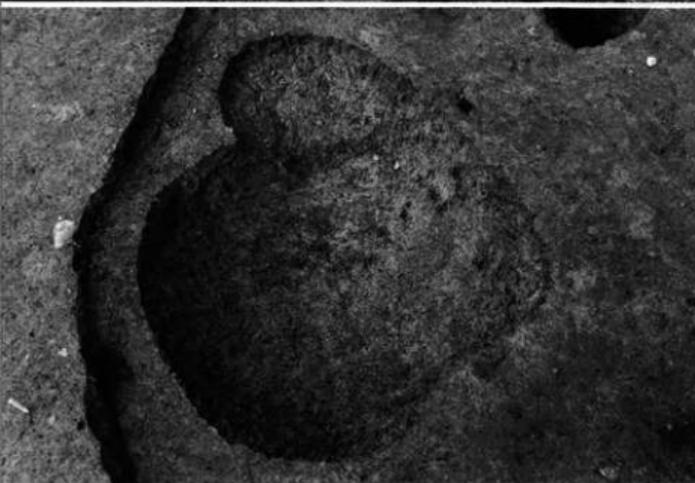


図版29

2号性格不明遺構

1号土壌(調査中)

(西より)



図版30

2号性格不明遺構

2号土壌

(東より)



図版31

2号性格不明遺構

3号土壌

(南より)

図版32

3号性格不明遺構

1号土壇断面

(西より)



図版33

3号性格不明遺構

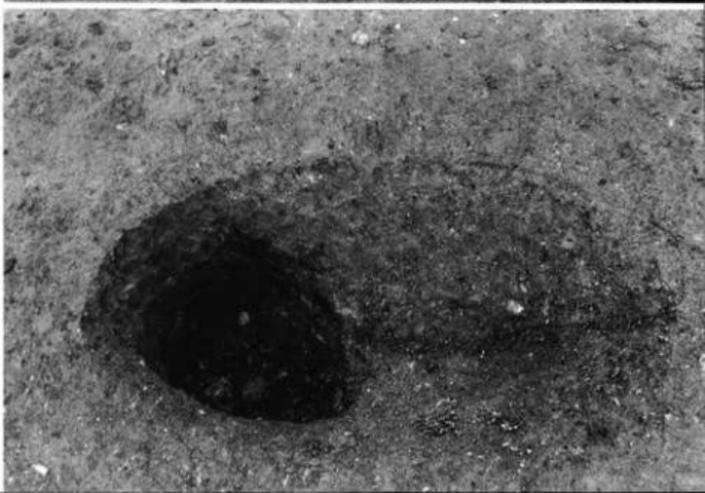
全景 (西より)



図版34

1号土壇

(南より)





1



2



3



4



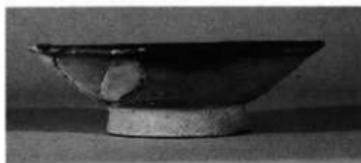
5



6



7



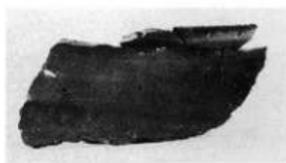
8

- | | | | |
|----------|---------|----------|---------|
| 1. 土師器环1 | (第28图1) | 5. 土師器残1 | (第29图2) |
| 2. 赤烧土器 | (第28图2) | 6. 土師器环3 | (第29图3) |
| 3. 土偶 | (第28图3) | 7. 土師器残 | (第29图4) |
| 4. 土師器环2 | (第29图1) | 8. 土師器环4 | (第29图5) |

图版35 出土遗物1



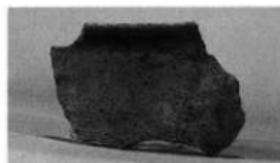
1



2



3



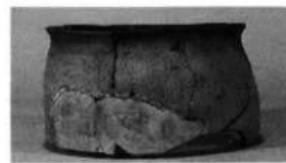
4



5



6



7



8

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 土師器甕 2 (第30図 1) | 5. 土師器甕 5 (第34図 2) |
| 2. 土師器甕 3 (第31図 1) | 6. 土師器甕 6 (第34図 1) |
| 3. 土師器甕 3 (第31図 2) | 7. 土師器甕 6 (第34図 3) |
| 4. 土師器甕 4 (第33図) | 8. 灰輪陶器甕 (第34図 4) |

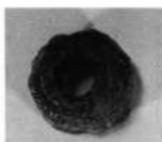
図版36 出土遺物 2



1



2



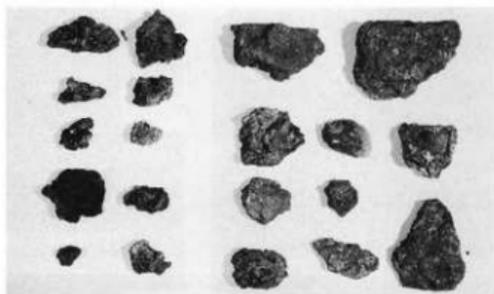
3



4



5



6

- | | | | |
|---------|----------|---------|----------|
| 1. 羽口 | (第30回 2) | 4. 羽口 3 | (第32回 3) |
| 2. 羽口 1 | (第32回 1) | 5. 羽口 4 | (第32回 4) |
| 3. 羽口 2 | (第32回 2) | 6. 鉄滓 | |

図版37 出土遺物 3



1. No 7 鉄塔試掘調査区出土縄文土器
(大木8a式)

2. No 7 鉄塔試掘調査区出土縄文土器
(大木8b式)

職 員 録

<p>社会教育課</p> <p>課長 阿部 達</p> <p>主幹 早坂春一</p> <p>文化財管理係</p> <p>係長 佐藤政美</p> <p>主事 岩沢克輔</p> <p>◦ 山口 宏</p>	<p>文化財調査係</p> <p>係長 佐藤 隆</p> <p>主事 結城 慎一</p> <p>教諭 菅原 和夫</p> <p>主事 木村 浩二</p> <p>◦ 篠原 信彦</p> <p>教諭 小野寺和幸</p> <p>◦ 佐藤美智雄</p> <p>主事 佐藤 洋</p> <p>◦ 金森 安孝</p> <p>◦ 佐藤 甲二</p> <p>◦ 吉岡 恭平</p> <p>◦ 上藤 哲司</p>	<p>主事 渡部弘美</p> <p>教諭 渡辺 誠</p> <p>主事 主浜光朗</p> <p>◦ 斎野裕彦</p> <p>◦ 長島栄一</p> <p>◦ 及川 格</p> <p>教諭 千葉 仁</p> <p>◦ 松本清一</p> <p>主事 高橋 泰</p> <p>◦ 鈴木善弘</p> <p>派遣職員 高橋勝也</p>
--	---	---

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物重瀬下セコイヤ化石林調査報告書(昭和39年4月)
- 第2集 仙台城(昭和42年3月)
- 第3集 仙台市燕沢善応寺横沢六古墳群調査報告書(昭和43年3月)
- 第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書(昭和44年3月)
- 第5集 仙台市南小泉法願塚古墳調査報告書(昭和47年8月)
- 第6集 仙台市荒巻五木松原跡発掘調査報告書(昭和48年10月)
- 第7集 仙台市富沢巖町古墳発掘調査報告書(昭和49年3月)
- 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書(昭和49年5月)
- 第9集 仙台市根岸町宗禪寺横穴群発掘調査報告書(昭和51年3月)
- 第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報(昭和51年3月)
- 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報(昭和51年3月)
- 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報(昭和52年3月)
- 第13集 南小泉遺跡一範圍確認調査報告書一(昭和53年3月)
- 第14集 栗遺跡発掘調査報告書(昭和54年3月)
- 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報(昭和54年3月)
- 第16集 六反田遺跡発掘調査(第2・3次)のあらまし(昭和54年3月)
- 第17集 北屋敷遺跡(昭和54年3月)
- 第18集 初江遺跡発掘調査報告書(昭和55年3月)
- 第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書(昭和55年3月)
- 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報(昭和55年3月)
- 第21集 仙台市開発関係遺跡調査報告書1(昭和55年3月)
- 第22集 経ヶ峯(昭和55年3月)
- 第23集 年報1(昭和55年3月)
- 第24集 今泉城跡発掘調査報告書(昭和55年8月)
- 第25集 三神峯遺跡発掘調査報告書(昭和55年12月)
- 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報(昭和56年3月)
- 第27集 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報(昭和56年3月)
- 第28集 年報2(昭和56年3月)
- 第29集 郡山遺跡1一昭和55年度発掘調査概報一(昭和56年3月)
- 第30集 山出上ノ台遺跡発掘調査概報(昭和56年3月)
- 第31集 仙台市開発関係遺跡調査報告書2(昭和56年3月)
- 第32集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
- 第33集 山口遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
- 第34集 六反田遺跡発掘調査報告書(昭和56年12月)

- 第35集 南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第1次調査報告(昭和57年3月)
- 第36集 北前遺跡発掘調査報告書(昭和57年3月)
- 第37集 仙台平野の遺跡群Ⅰ—昭和56年度発掘調査報告書—(昭和57年3月)
- 第38集 郡山遺跡Ⅱ—昭和56年度発掘調査概要—(昭和57年3月)
- 第39集 燕沢遺跡発掘調査報告書(昭和57年3月)
- 第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概要Ⅰ(昭和57年3月)
- 第41集 年報3(昭和57年3月)
- 第42集 郡山遺跡—宅地造成に伴う緊急発掘調査—(昭和57年3月)
- 第43集 渠遺跡(昭和57年8月)
- 第44集 河ノ米遺跡発掘調査報告書(昭和57年12月)
- 第45集 茂庭—茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書—(昭和58年3月)
- 第46集 郡山遺跡Ⅲ—昭和57年度発掘調査概要—(昭和58年3月)
- 第47集 仙台平野の遺跡群Ⅱ—昭和57年度発掘調査報告書—(昭和58年3月)
- 第48集 史跡遺見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概要(昭和58年3月)
- 第49集 仙台市文化財分布調査報告Ⅰ(昭和58年3月)
- 第50集 若切畑中遺跡発掘調査報告書(昭和58年3月)
- 第51集 仙台市文化財分布地図(昭和58年3月)
- 第52集 南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第2次調査報告(昭和58年3月)
- 第53集 中田畑中遺跡発掘調査報告書(昭和58年3月)
- 第54集 神明社宮跡発掘調査報告書(昭和58年3月)
- 第55集 南小泉遺跡—青葉女ノ子園移転新宮工事地内調査報告(昭和58年3月)
- 第56集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概要Ⅱ(昭和58年3月)
- 第57集 年報4(昭和58年3月)
- 第58集 今泉城跡(昭和58年3月)
- 第59集 下ノ内浦遺跡(昭和58年3月)
- 第60集 南小泉遺跡—倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書—(昭和58年3月)
- 第61集 山口遺跡Ⅱ—仙台市体育館建設予定地—(昭和59年2月)
- 第62集 燕沢遺跡(昭和59年3月)
- 第63集 史跡陸奥国分寺跡昭和58年度発掘調査概要(昭和59年3月)
- 第64集 郡山遺跡Ⅳ—昭和58年度発掘調査概要—(昭和59年3月)
- 第65集 仙台平野の遺跡群Ⅲ—昭和58年度発掘調査報告書—(昭和59年3月)
- 第66集 年報5(昭和59年3月)
- 第67集 宮沢水田遺跡—第1冊—泉崎前地区(昭和59年3月)
- 第68集 南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第3次調査報告(昭和59年3月)
- 第69集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概要Ⅲ(昭和59年3月)
- 第70集 下ノ内遺跡発掘調査報告書(昭和59年3月)
- 第71集 後河原遺跡(昭和59年3月)
- 第72集 六反田遺跡Ⅱ(昭和59年3月)
- 第73集 仙台市文化財分布調査報告書Ⅱ(昭和59年3月)
- 第74集 郡山遺跡Ⅴ—昭和59年度発掘調査概要—(昭和60年3月)
- 第75集 仙台平野の遺跡群Ⅳ(昭和60年3月)
- 第76集 仙台北三ノ丸跡発掘調査報告書(昭和60年3月)
- 第77集 山田上ノ台遺跡—昭和59年度発掘調査報告書—(昭和60年3月)
- 第78集 中田畑中遺跡—第2次発掘調査報告書—(昭和60年3月)
- 第79集 欠ノ上I遺跡発掘調査報告書(昭和60年3月)
- 第80集 南小泉遺跡—第12次発掘調査報告書—(昭和60年3月)
- 第81集 南小泉遺跡—第13次発掘調査報告書—(昭和60年3月)
- 第82集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概要Ⅳ(昭和60年3月)
- 第83集 年報6(昭和60年3月)
- 第84集 仙台市文化財分布調査報告書Ⅲ(昭和60年3月)
- 第85集 宮城県仙台市愛宕山築御横六古墳発掘調査報告書(昭和60年8月)
- 第86集 郡山遺跡Ⅵ(昭和61年3月)
- 第87集 仙台平野の遺跡群Ⅴ—昭和60年度発掘調査報告書—(昭和61年3月)
- 第88集 上野遺跡発掘調査報告書
- 第89集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概要Ⅴ
- 第90集 若林城跡—平安時代の集落跡
- 第91集 東北電力鉄塔関係遺跡調査報告書
- 第92集 五城中北宮跡発掘調査報告書
- 第93集 年報7(昭和61年3月)

仙台市文化財調査報告書第91集

昭和60年度

東北電力鉄塔関係遺跡調査報告

昭和61年3月

発行 **仙台市教育委員会**

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 **株式会社 東北プリント**

仙台市立町24 TEL 63-1166

